

静岡市海洋文化拠点施設
基本計画

2019年2月

静岡市

目次

第一章	海洋文化拠点が清水、海洋分野にもたらすものとは _____	1
1-1	「国際海洋文化都市・清水」と海洋文化拠点施設整備への期待 _____	1
1-2	施設が創る4つの大きな効果 _____	4
第二章	世界初のテーマを持つ施設が提供する、多様な価値 _____	6
2-1	清水でしか実現できない「海洋・地球に関する総合ミュージアム」のテーマ _____	6
2-2	海とのかかわりを広く学べる場をめざして _____	7
第三章	多様な「つながり」が創るミュージアムの活動 _____	8
3-1	施設価値を高める活動理念 _____	8
3-2	「つながり」が創るミュージアム活動の基本的な考え方 _____	8
3-3	基本的な考え方をもとにした魅力的かつ持続的な活動 _____	10
3-4	様々なターゲットに対し施設が提供する価値 _____	15
第四章	海洋・地球を総合的に体感させるための展示 _____	16
4-1	「海洋・地球を総合的に理解する」ための展示の基本的な考え方 _____	16
4-2	展示展開の基本方針 _____	17
4-3	展示ストーリー _____	18
4-4	展開イメージ _____	19
第五章	海とつながる施設をめざして _____	28
5-1	建設候補地と諸条件 _____	28
5-2	国際海洋文化都市・清水を象徴する施設の基本的な考え方 _____	29
5-3	教育普及・展示を中心とした機能構成と諸室の必要面積 _____	31
5-4	施設の魅力を向上するために _____	37
第六章	魅力的・持続的な施設運営のために _____	39
6-1	「海洋文化・海洋教育のメッカ」をめざすための施設運営の考え方 _____	39
6-2	質の高いミュージアムを構築するための事業の考え方 _____	40
6-3	施設の効果を高めるために本事業と併せて必要となる取り組み _____	45

第一章 海洋文化拠点が清水、海洋分野にもたらすものとは

1-1 「国際海洋文化都市・清水」と海洋文化拠点施設整備への期待

【「国際海洋文化都市・清水」をめざして】 ※「清水港海洋文化拠点施設基本構想」より

清水は、海洋に関連する産業・経済を基盤に、港とまちが一体となって、発展、形成されてきた港町ですが、近年では、産業の変化に伴う、中心市街地の活力の低下や、東日本大震災以降、想定が見直された津波災害への懸念など、以前よりも厳しい状況に置かれていると言えます。

そこで、これからも、港や海があることが、魅力や強みと感じられるようなまちづくりを続けていくために、「国際海洋文化都市・清水」を都市のビジョンとして掲げ、これまで清水の成長・発展を支えた港湾産業都市の礎の上に、新たに、観光サービス産業や海洋新産業を育てながら、国内外から人々が訪れ、交流する仕組みをつくっていくことが必要です。

清水港の周辺には、その歴史を通じて、海洋に関連する産業、観光スポット、交通手段、大学や研究機関など、様々な地域資源が集積・立地し、現在も、清水が国内外へ誇れる力・魅力を持ったものが多く存在しています。また、近年の追い風として、平成25年の富士山の世界遺産登録などを契機とした観光、クルーズ船の需要の高まりや、平成19年の海洋基本法の制定を契機とした海洋への社会的な関心の高まりなどもあります。

今後は、産学民官の関係者が垣根を越えて連携し、こうした清水における海洋や港に由来する資源やチャンスを活かして新たな海洋産業・研究、観光交流などを活発に創出し、国内外から人々が訪れ交流する「国際海洋文化都市」の実現をめぐってまいります。

「国際海洋文化都市」を実現していくために、具体的には、海洋をテーマとした「人材育成」、「産業・ビジネス振興」、「にぎわい創出」の3つの取り組みを以下のように、相互連携させながら進めてまいります。

①海洋人材の育成

清水港と関係の深い海洋学術・研究機関や、「海のみらい静岡友の会」などの民間活動を始めとする産学民官の関係者の連携により、市民の海洋への関心を高める普及啓発や高度な海洋人材育成を行います。

②海洋産業・ビジネスの振興

海洋に係る企業・研究機関により構成された「静岡市海洋産業クラスター協議会」をプラットフォームとして、海洋産業イノベーションを進め、新たな経済活動、雇用を創出していきます。

③海を活かしたにぎわいの創出

客船寄港の増加や物流機能の移転などにより、大きく変化しつつある日の出地区を始めとして、駅前江尻漁港地区や、水上バスで結ばれた三保地区などにおいて、賑わい空間の創出や回

遊動線の整備を進め、観光交流人口増加や MICE 誘致を進めます。

以上の海洋を軸とした「まち」「ひと」「しごと」の創出を進めていくことで、将来は、このエリアへ、海洋産業や研究の機能がさらに集積し、海洋産業・研究が活発化するとともに、海洋への関心・親しみが深い市民、海洋に関わる仕事や学びをしている市民が増えていくことが期待されます。

■ 清水港周辺の海洋関連地域資源（図表 1-1）



【本計画の位置づけ】

この「(仮称) 清水港海洋文化拠点施設基本計画」(以下「基本計画」という。)は、「清水港海洋文化拠点施設基本構想」に基づき、施設整備を具体化するため、館のミッションやテーマ、活動理念について整理するとともに、活動計画や展示計画、施設計画、運営計画などを検討し、とりまとめたものです。

この基本計画により本施設の基本的な考え方を明確にし、今後の施設整備を検討していくうえでの軸となる指針としていきます。

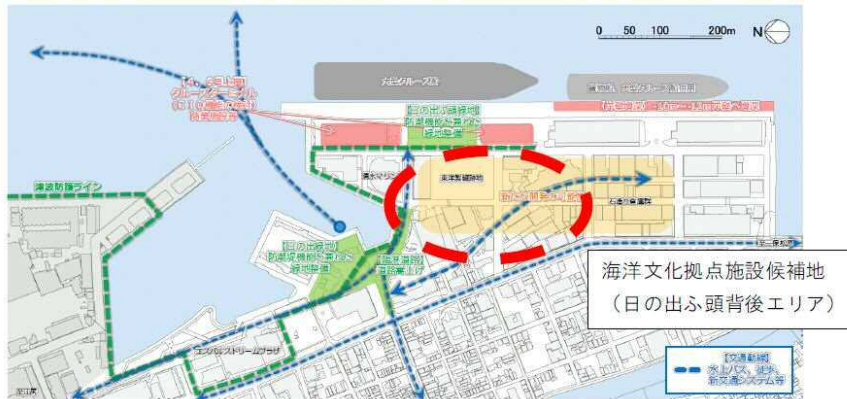
【基本計画検討のための基本構想に基づく基本的事項の整理】

(仮称) 清水港海洋文化拠点施設 (以下「本施設」という。) における基本的な考え方を検討していくにあたって、下記の通り基本構想の要点を整理します。

■基本構想のポイント (図表 1-2)

(1) 立地場所

様々な条件をもとに日の出ふ頭背後エリアが望ましいと考えられ、にぎわいを面的に波及させていくことが求められます。

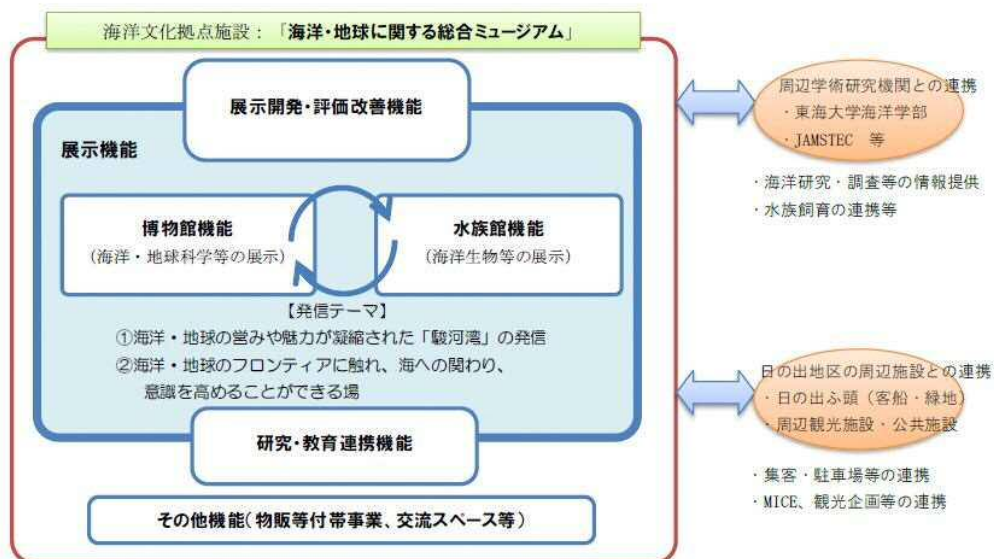


(2) 規模

東海大学海洋科学博物館 (約 6,400 m²) を含む類似施設 (水族館など) などの規模を踏まえ、数千 m² から 10,000 m² 前後を想定し、基本計画で必要諸室の検討を行い、概要を定めることとします。

(3) 基本的な考え方

清水港周辺が誇るべき「駿河湾」や、海洋関連学術・研究機関の集積を活かし、「海洋」を通じて人々が集まることができる施設として、「海洋・地球に関する総合ミュージアム」をめざします。



1-2 施設が創る4つの大きな効果

今後、清水港周辺エリアは、海洋や港に由来する地域資源やチャンスを活かして、新たな海洋研究・産業、観光交流などを活発に創出し、国内外から人々が訪れ、交流する「国際海洋都市・清水」の実現をめざしていきます。そのような中、国際客船の玄関口である日の出ふ頭周辺にこれから新たに生まれる集客・交流ゾーンの核となるこの拠点施設は、海を理解し、海のこれからは触れる「オーシャンフロンティア^{※1}」と呼べるミュージアムをめざします。

世界に開かれた清水港・日の出地区から 海と人との関りを総合的に発信する「オーシャンフロンティア」ミュージアム

さらに「オーシャンフロンティア」ミュージアムとしての機能を担っていくために、特に重要な4つの効果を生み出すことを本施設のミッションとして定めることとします。

(1) 国際海洋文化都市としてのブランド化

- ・国際海洋文化都市のイメージを創りだす中心施設として位置づけます。
- ・駿河湾を中心とする海洋研究をはじめとした様々な価値を集結します。
- ・清水地域全体の活性化に寄与するシティブランディング^{※2}の核へ。

(2) 国際的な集客と賑わい創出

- ・駿河湾に限らない地球規模のテーマを設定することで国際的な集客を創造します。
- ・周辺施設の連携拠点となることで清水港全体を活性化します。
- ・クルーズ船誘致と連携することでグローバルな交流拠点をめざします。

(3) 海洋分野を拓く研究・教育促進

- ・官民を問わない海洋にかかわる多様な人材の交流拠点をめざします。
- ・特に JAMSTEC・東海大学と積極的に連携し、海洋・地球の統合的理解を促すための情報発信を行います。
- ・未来の海洋文化を形成していく次世代層を育成するために活動します。

(4) 海洋産業の振興と経済波及

- ・海洋に関する多様な産学交流を図るための拠点として展開します。
- ・未来を担う新産業創出のための課題や研究などの情報を集約・発信します。
- ・清水にとどまらない静岡市全域における経済波及をめざします。

■拠点施設のミッション（図表 1-3）



※1 「オーシャンフロンティア」

海の最先端、海の未来、海への扉。

※2 「シティブランディング」

まちについて、多くの人に共通のイメージを持ってもらうこと。

第二章 世界初のテーマを持つ施設が提供する、多様な価値

2-1 清水でしか実現できない「海洋・地球に関する総合ミュージアム」のテーマ

「海洋・地球に関する総合ミュージアム」は、水族館や博物館といったこれまでのミュージアムの垣根を越えた、他に類を見ない新たな視点のミュージアムです。そして、このテーマは「駿河湾」を有し、海洋文化・研究のフロンティアとなる清水だからこそ成り立つものだと考えられます。本施設では、清水ならではの、このミュージアムでしか扱うことができないようなテーマを発信し、オリジナリティのある展開をめざします。

(1) わたしたち静岡市民に身近な「駿河湾」の魅力

静岡市民にとって身近であり、海洋・地球の営みや魅力が凝縮された、世界的にみても特色のある海である「駿河湾」は、このミュージアムのカギを握るテーマです。その生物、地形、海流などについて、今後進められる調査研究の動きも含めて、様々な観点から紹介し、その奥深さを総合的に理解できる展示・発信・交流を行います。そして、子供たちを始めとする数多くの静岡市民が「駿河湾」「海洋」に対する愛着や誇りを持つことができるような施設をめざします。

また、深さ 2,500m という日本一の深海「駿河湾」を 3,000m 級の富士山や南アルプスといった、高低差 5,000m 以上の環境と一体のフィールドとして捉えることで、この施設でしか展開できないテーマとして紹介します。

(2) 全世界の人々に共通である「地球」へのひろがり

「駿河湾」を入口としながらも、海洋と切り離すことのできない「地球」についても積極的にテーマとして扱います。

海洋調査から見えてくる地球スケールのプレート活動や地球の成り立ち、世界レベルでの海洋環境の変化などの紹介を通じて、JAMSTEC の掲げるような「海洋 地球 生命の統合的理解」へ挑戦していきます。

(3) 海洋にかかわる多様な人・情報のつながり

国内外の研究機関や海洋博物館と連携を図りながら、最先端の研究動向も含めた情報収集・発信を行います。そうすることで、学術・研究機関、産業団体にとっても、ここが海洋文化・研究・産業にかかわる情報をいち早く入手でき、また PR できる拠点となるといったメリットを提供していきます。

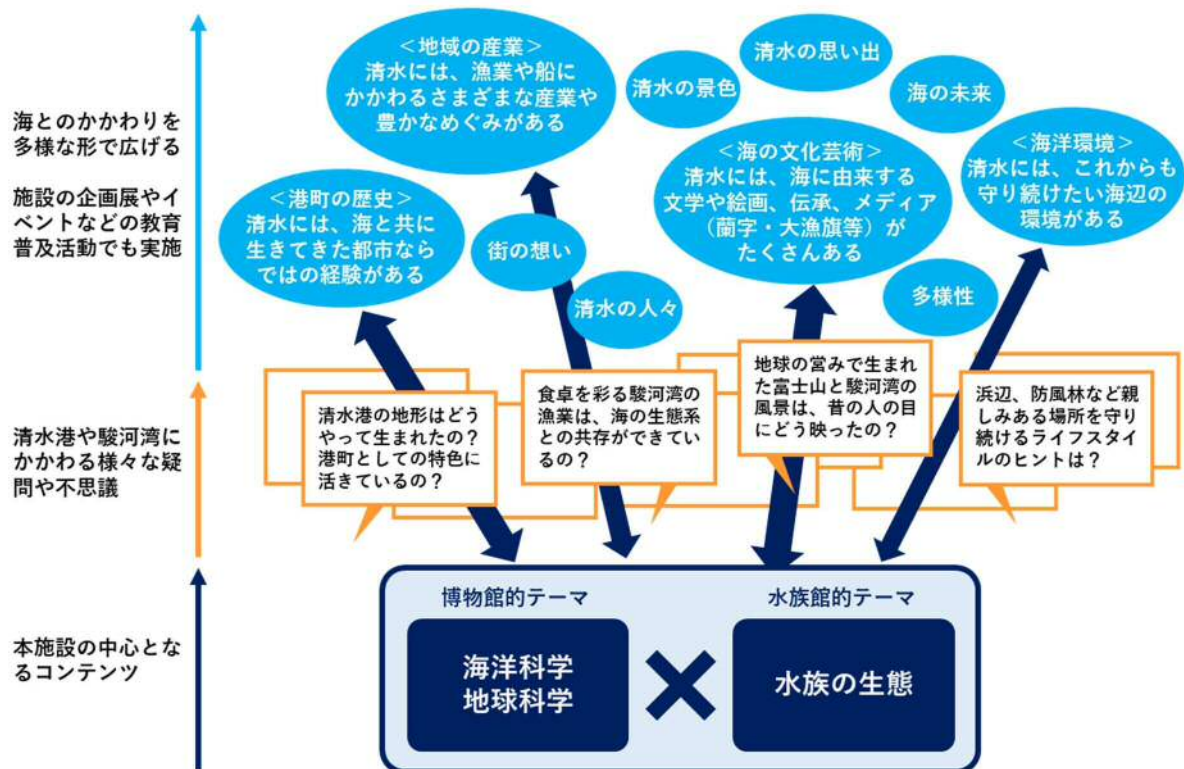
また、総合的、先端的な発信を行う一方で、幅広い市民、訪れた人たちが、海と関わりリテラシー（感性・知識・考え方・行動など）を学べる展示や体験的なプログラムを用意し実践します。

2-2 海とのかかわりを広く学べる場をめざして

本施設においては上記テーマを扱うにあたって、博物館的コンテンツである「海洋科学」「地球科学」に関連した活動と、水族館的コンテンツである「水族の生態」という、大きく「科学（サイエンス）」に寄る活動が主となります。しかし、施設活動をサイエンスに寄る展開に限ってしまえば、先に述べた「海洋・地球に関する総合ミュージアム」としてのミッションを達成するに不十分です。

したがって施設のコンテンツや活動においては、サイエンスをベースに人文・社会（身近な暮らしや文化）へとつなげる、複眼的な視点が求められます。また、来場者にとって身近な清水港や駿河湾にかかわる様々な疑問や不思議を通じて、来場者と海とのかかわりを多様な形で広げていくことをめざします。

■サイエンスと人文・社会をつなげ、複眼的な理解を広げていくイメージ（図表 2-1）



第三章 多様な「つながり」が創るミュージアムの活動

3-1 施設価値を高める活動理念

基本計画の中では拠点施設整備の意義、施設の目指す姿や基本的性格をふまえて、活動を行っていく際に大切にすべきことを活動理念として明らかにします。「活動理念」は、今後施設のさまざまな活動・展開を考える際に、常にそこへ戻って考える拠り所、行動の規範となるもの、議論となったときの判断基準となるものとして定めます。

海洋科学を中心とした「つながり」により 常に新鮮で魅力的な活動を創る

海洋・地球科学の学術的な「情報のつながり」をベースに
海洋・地球の未来を創る「人のつながり」の参画により
常に最先端の情報、鮮度の高い魅力的な活動へ

3-2 「つながり」が創るミュージアム活動の基本的な考え方

本施設は、これまでにない「海洋・地球に関する総合ミュージアム」を標榜しているため、活動もこれまでの一般的なミュージアムと同じでは魅力が十分に発揮できません。上述したような活動理念にもとづき具体的な活動内容を検討するにあたり、3つの基本的な考え方を下記のように示します。この3つの基本的な考え方が有機的に作用することで、「海洋・地球に関する総合的なミュージアム」は常に新鮮で魅力的な活動をすることが可能となります。

(1) 海洋科学に関わる学術コンテンツの集積

まず本施設では、海洋・地球に関わる最先端かつ魅力的な学術コンテンツを外部から収集・蓄積していきます。その収集にあたっては、JAMSTEC や東海大を中心とした専門的な研究機関・大学との連携を中心に、情報を得られるような体制の構築をめざします。このように「情報のつながり」を活動のベースに有することで、常に最新の研究成果・情報を施設で扱うことができるようになり、施設の魅力が向上します。

(2) 知的好奇心を刺激する「体験プログラムづくり」「展示コミュニケーション化」

そして、この「情報のつながり」による学術コンテンツの集積をもとに、「体験プログラムづくり」「展示コミュニケーション化」といった「情報の翻訳」を行います。特にメインターゲットである一般の方々や子供たちにとって、学術コンテンツそのままの状態では理解することが難しいと考えられるため、誰でもわかりやすく学ぶ・体験できるように「情報の翻訳」が必要となります。

この「情報の翻訳」にあたっては場合によっては外部のデザイナーやコーディネーター

などとの「人のつながり」を活用・連携しながら開発を行うことで、より魅力的な「エデュテインメントコンテンツ※3」として再構築をします。

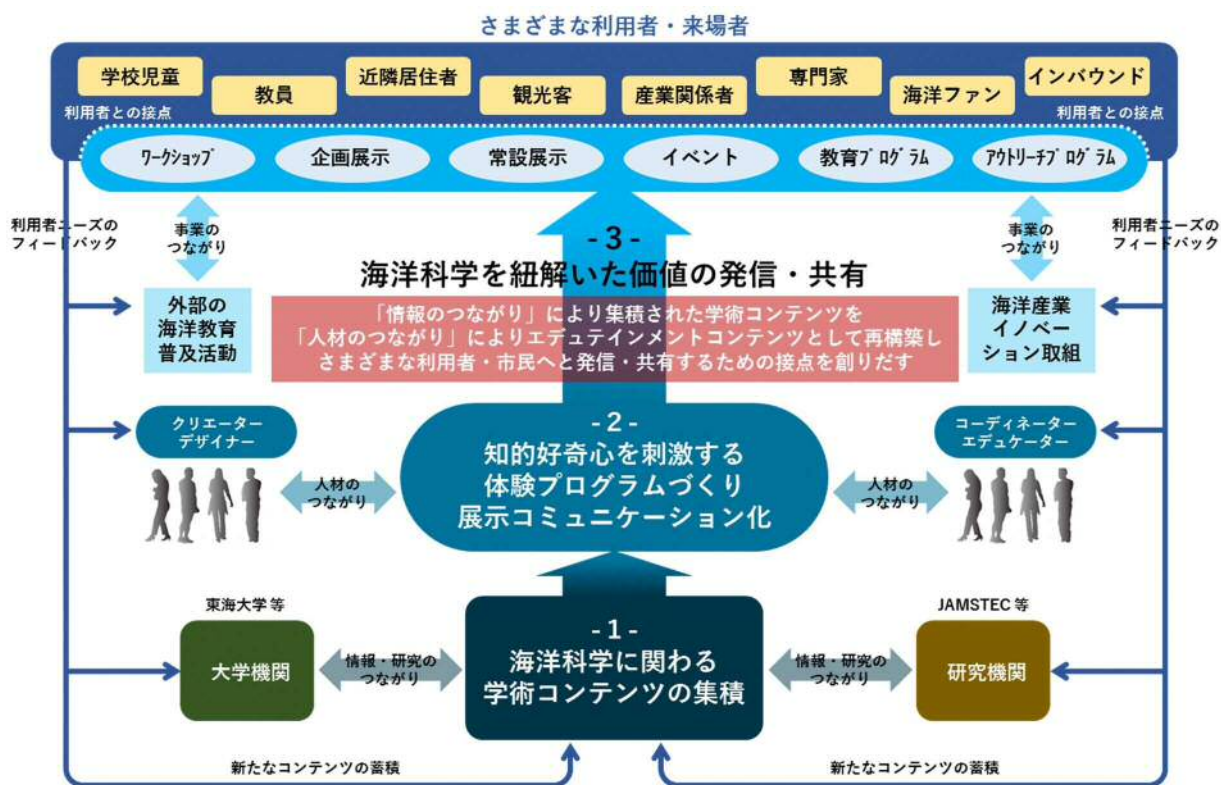
(3) 海洋科学を紐解いた価値の発信

施設として様々な方々に海洋・地球を総合的に理解していただくために、「エデュテインメントコンテンツ」として再構築された情報を発信し、一般の方々への「つながり」を生み出します。発信の方法は展示やイベントをはじめとした施設内でのプログラムに限らず、施設外でのアウトリーチ活動※4にも広がっていきます。コンテンツの特性や内容により発信の方法は検討していくこととします。

さらに施設外で行われる海洋教育・普及啓発活動や、海洋産業イノベーションの取り組みとも連携をめざします。

上記のような、海洋科学を中心とした「つながり」による、3ステップの次世代型のミュージアム活動により、常に新鮮で魅力的な活動を創り出していきます。

■基本的な考え方と「活動のつながり」のイメージ (図表 3-1)



※3 「エデュテインメントコンテンツ」

教育（エデュケーション）と娯楽（エンターテインメント）を合わせた言葉。ゲームや音楽、体験などの切り口を持たせながら、教育の内容が伝わるコンテンツ。

※4 「アウトリーチ活動」

出前授業や講演会、広報誌など様々な方法で活動内容を対外的に周知し、届けること。

3-3 基本的な考え方をもとにした魅力的かつ持続的な活動

「基本的な考え方」と「活動のつながり」から、本施設における具体的な活動を検討します。

(1) 資料収集・飼育管理

【基本的な方針】

- ・市民や様々な利用者への情報発信のために、駿河湾・地球における謎の解明にかかわる資料を財産として保全し、適切に未来へ引き継ぐことを主な目的とします。
- ・収集保存にあたっては現地保存を原則としつつ、コンテンツを提供いただく大学や研究機関などとの連携・役割分担のもと、最善の方法を取ることとします。
- ・特に水族生物や海洋科学に関する資料収集・飼育管理については、東海大学と積極的な連携を行うことで、役割を分担することとします。
- ・資料や生物などの充実が拠点施設の個性や評価に結びつくよう、情報公開・展示活動や研究連携活動との連携や、長期的視野に立って計画的な収集保存活動を行います。

【対象】

- ・「海洋・地球を総合的に理解する」ために必要な自然・文化・歴史・科学に関する資料を収集・飼育の対象とします。
- ・実物資料や生物をはじめとして写真・映像・音響資料や、文献資料、複製・模型、情報などについても収集するものとし、それぞれの性質に配慮し、適切に整理・保存・飼育を行います。
- ・特に東海大学海洋科学博物館と連携を図り、館が現在有する資料の一部を引き継ぐ、互いに共有するなど、拠点施設との相互での魅力づくりのために検討を行います。

【体制】

- ・学芸員や飼育管理に関わる専門職員などによる管理体制を確保します。
- ・必要が生じた際には連携先の大学や研究機関などからの共同体制を受け入れ、連携をしながら適切な収集保存・飼育管理を行います。
- ・特に東海大学海洋科学博物館とは積極的な連携を行い、人材の交流なども視野に入れることで、より専門的な管理体制をめざします。

【方法】

- ・資料の収集、生物の飼育管理は、採集、購入、寄贈、寄託、借用、移管、交換、製作などの方法によって行います。
- ・収集にあたっては、連携先の大学や研究機関を中心に、市民・利用者や市内外の博物館や水族館などの関係機関などと協力・連携して取り組みます。
- ・資料や生物の選別にあたっては、必要に応じて設置する、評価委員会において協議・判断するほか、より専門的な判断が必要な場合には、関係する有識者などと協議を重ねたうえで収集・飼育管理することとします。

(2) 研究連携・コンテンツ開発

【基本的な方針】

- ・「海洋・地球に関する総合的なミュージアム」において、その基となる「情報のつながり」を育むための根幹となる活動です。
- ・大学や研究機関と蜜に連携をとることで、海洋・地球に関する最新の研究成果である学術コンテンツを本施設でのプログラムや展示に活用するために情報を集約します。
- ・多様な外部ブレーンと連携することで、学術コンテンツをエデュテイメントコンテンツへと翻訳し、本施設でのプログラムや展示を開発します。

【対象】

- ・「海洋・地球を総合的に理解する」ために必要な学術コンテンツを主な取り扱い対象とします。
- ・しかし、開発するプログラムや展示などアウトプットの内容によっては、海洋や地球と関係の無い分野からアプローチするなど、その対象範囲は一定に定まりません。

【体制】

- ・学術コンテンツを正確に把握し、魅力的なポイントを理解したうえでエデュテイメントコンテンツを開発するために、学術コンテンツの集約に特化したチームと、プログラム・展示開発に特化したチームがそれぞれ求められます。

【方法】

- ・学術コンテンツの集約に特化したチームは、コンテンツの提供先となる大学や研究機関と連携をとり、その魅力を紐解きます。
- ・プログラム・展示開発に特化したチームは、外部のクリエイター/デザイナーやサイエンスコミュニケーター^{※5}などの有識者と協働し、エデュテイメントコンテンツを組み立てます。

(3) 情報公開・展示

【基本的な方針】

- ・上述の活動により蓄積、翻訳された「海洋・地球を総合的に理解する」ための資産や情報を、市民やさまざまな利用者、だれもが気軽にふれられるように公開していきます。
- ・公開に際しては、コンテンツの魅力だけに囚われず、集客力も考慮した展開とすることで施設の持続的な活動に寄与することとします。
- ・ただし、施設の教育的な側面には十分に配慮し、次世代を担う子供たちや利用者が、さまざまな学びや体験ができるよう積極的な取組を行います。
- ・さらに、この施設での情報公開がさらなる発展的な情報の受け入れにつながるような仕掛けを検討していきます。

【対象】

- ・「海洋・地球を総合的に理解する」ために必要な学術コンテンツを主な取り扱い対象とします。
- ・しかし、開発するプログラムや展示などアウトプットの内容によっては、海洋や地球と関係の無い分野からアプローチするなど、その対象範囲は一定に定まりません。

【体制】

- ・上述のコンテンツ開発と切り分けられない部分が多いため、同様もしくは密に連携をとる体制で活動を行います。
- ・展開内容によっては外部団体などとかかわることも多いと考えられるため、専門的な人材などを確保する必要があると考えられます。

【方法】

- ・公開の方法については、コンテンツの内容を鑑み適切な方法を選ぶこととしますが、基本的には「展示」と「その他メディア」での公開を行います。
- ・「展示」については常設展示、企画展示、映像シアターを主とし、コンテンツの特性や普遍性を考慮し公開する方法を選定します。
- ・「その他メディア」については、ウェブサイト、SNS、館外での広告など多様なシーンが想定されると共に、施設運営にかかる様々なニーズで情報公開を行う必要があるため、そのニーズに応じた方法を都度検討していくこととします。

(4) 交流・教育普及

【基本的な方針】

- ・資料収集・飼育管理活動、研究連携・コンテンツ開発活動によって蓄積されたエデュテインメントコンテンツを市民・来場者に利用いただくための活動です。
- ・活動にあたっては、多様な利用者が主体的に交流できることを重視し、その活動は館内での活動にとどまらず、アウトリーチとしても展開させることにより、海洋・地球に親しんでいただく場を広げていきます。
- ・特に未来を担う子供たちが、さまざまな学びや体験のプログラムと世代を超えた交流をおして、感性や創造力を伸ばすことができるよう積極的な取組を行うと共に、学校教育に活用していただける場を提供します。
- ・施設内のあらゆる場に「交流」のためのスペースを設けることで、活動理念でもある『海洋科学を中心とした「つながり」』を生み出していきます。

【活動のポイント】

①海洋・地球に親しみをもちいただく

- ・市民や利用者のだれもが気軽に、それぞれの興味・関心に応じて、施設の活動に参加・参画できる機会を提供します。
- ・利用者一人ひとりの海洋・地球に関わる学習や活動に協働します。

②小中学校における「海洋教育」へのひろがり

- ・海洋の学びを深める場として、静岡市内の児童はもとより、全国の小中学校、児童から必要とされる施設となることをめざします。
- ・小中学校が課外授業などで訪れやすくなるような活動や設備の導入を検討します。

③生涯学習として、海洋について楽しく学ぶことができる

- ・生涯学習社会にあって、多世代の多様な学びの意欲に応えるよう、海洋研究の紹介や体験プログラム、教材を提供していくことをめざします。
- ・利用者への価値提供だけでなく、一般の方々が運営する側として関わることのできる仕組み（ミュージアムボランティア、市民解説員など）により、活動しながら学びを深める機会をつくることも検討します。

④他の文化的施設などとの地域連携を図る

- ・本施設の周辺に立地する文化施設などと連携することで、海洋・地球に親しみを抱いていただくための異分野とのコラボレーションや、広報宣伝を行い、利用者の裾野を広げます。
- ・博物館や水族館、科学館などの類似施設との積極的な連携により、より利用者に喜ばれるような活動をめざします。

⑤清水港を中心とした海洋・地球のフィールドに出る

- ・本施設での学習・体験プログラムにとどまらず、施設活動によるノウハウを活用することで、展示と連携した屋外プログラムなど、さらなる深い学び・体験を提供します。
- ・広域の周辺には、地球環境史ミュージアム、南アルプスユネスコエコパーク、世界で最も美しい湾クラブ加盟の駿河湾、伊豆半島ジオパーク、世界文化遺産富士山、など、ダイナミックに地球を感じることができる施設、エリアが集まっており、それらとも積極的に連携を図っていくことをめざします。

(5) 海洋産業振興

【基本的な方針】

- ・大学や研究機関との連携による学術コンテンツの収集や、最新の研究成果の集積により、海洋産業の振興に寄与する情報を発信します。
- ・企画展示などを活用することで、清水の海洋産業を世界に発信する場を設けます。
- ・清水の海洋研究や海洋産業のイノベーションに関する情報交流やPRの拠点としても機能します。

【活動のポイント】

①海洋 MICE など、国際会議での活用

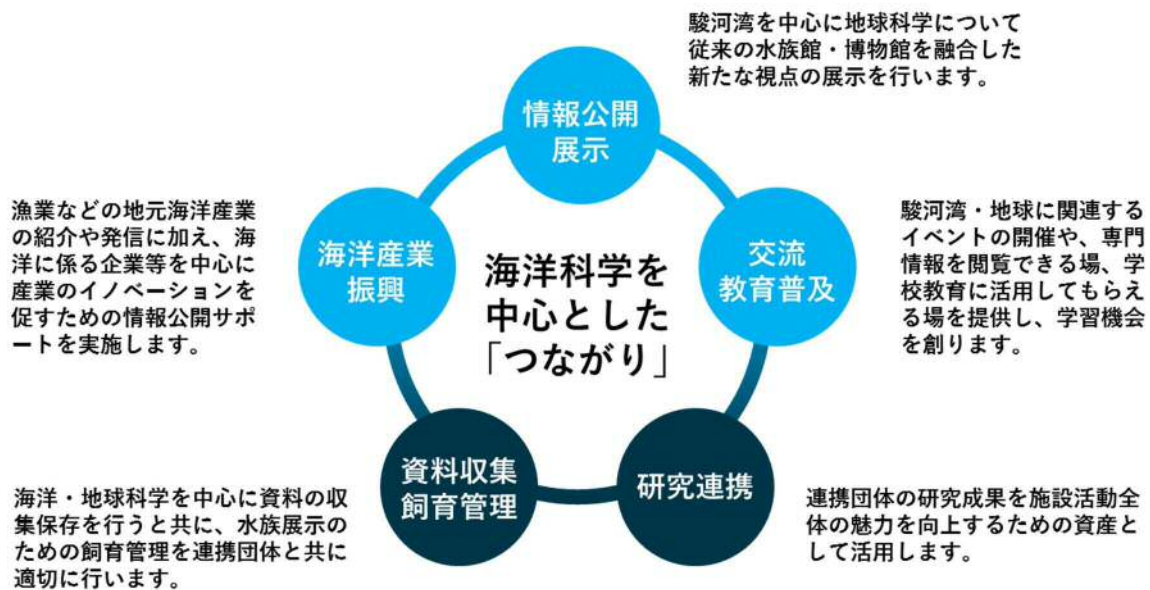
- ・グローバルな海洋産業関係者や研究者の興味を惹くような施設活動、展示や体験プロ

- グラムを提供することで、専門家が世界中から集まるような施設をめざします。
- ・清水の国際的な海洋・地球科学分野における地位向上へ寄与します。

②産業イノベーションへの寄与

- ・清水港周辺で行われる産学官の海洋産業イノベーションの活動（静岡市海洋産業クラスター創造事業など）と連携を図ります。
- ・情報収集・発信、関係者の交流など多様な側面から地域の海洋産業イノベーションを支援、活性化することにより、将来的に海洋産業イノベーションの推進や産学機関・関係者の更なる集積をめざします。

■施設の基本的な5つの活動



※5 「サイエンスコミュニケーター」

科学者や技術者と一般の人々をつなぐ人材。博物館などにおいて、一般の人々へ科学の内容をわかりやすく案内し、疑問に答え、関心や理解を助けることを担う役割を持つ者。

3-4 様々なターゲットに対し施設が提供する価値

本施設は、扱うコンテンツや立地の特性から、一般的な水族館やミュージアムに比べ多様なターゲット・利用シーンが見込まれます。そのため、下記のようにターゲットごとに展開のポイントを明確にすることで、今後の検討における要点を整理します。

主なターゲット	ターゲットへの訴求ポイント	活動や取り組みの例（イメージ）
地元の児童生徒・学生	<ul style="list-style-type: none"> 海洋・地球科学に親しみを抱かせる 清水港や駿河湾など地域の価値に愛着を抱かせる 日常的な学習や活動の場を提供する 	<p>体感型展示で海洋の魅力をわかりやすく紐解く</p>  <p>サイエンスへ誘う研究者との対話</p>  <p>学習指導要領を踏まえた学校教育に使いやすい展示</p> 
地元学校の教員	<ul style="list-style-type: none"> 課外授業における活動の場として連携する 学校教育カリキュラムにおけるヒントを提供する 海洋教育にかかるスキルアップの機会を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
近隣圏域の居住者（個人旅行）	<ul style="list-style-type: none"> 清水港や駿河湾など地域の価値に愛着を抱かせる 生涯学習の場を提供する レクリエーションとしての癒しを提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
静岡・清水地域の若年層	<ul style="list-style-type: none"> 清水港やウォーターフロントに親しみを抱かせる レクリエーションとしての癒しを提供する 海洋や地球にかかわるコミュニティ形成の機会を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
国内・団体旅行者	<ul style="list-style-type: none"> 駿河湾自体を知ってもらう レクリエーションとしての癒しを提供する 周辺の観光地への入口・拠点としての場を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
海外インバウンド旅行者	<ul style="list-style-type: none"> 駿河湾の認知度を向上する 富士山とあわせ、清水・日本のイメージを印象づける 海洋・地球に関する最先端情報を提供する 周辺の観光地への入口・拠点としての場を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
コアな海洋ファン	<ul style="list-style-type: none"> 海洋・地球に関する最先端情報を提供する 海洋にかかるスキルアップの機会を提供する 海洋や地球にかかわるコミュニティ形成の機会を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
専門家・研究者	<ul style="list-style-type: none"> 海洋・地球に関する最先端情報を提供する MICEなど会合の際の拠点を提供する 海洋や地球にかかわるコミュニティ形成の機会を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 
海洋産業関係者	<ul style="list-style-type: none"> 海洋・地球に関する最先端情報を提供する 産学官連携の拠点としての場を提供する 新産業創出やイノベーションの機会を創造する 企業等の取り組みPRの場を提供する 	<p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p>  <p>洗練されたデザインが若者を惹きつけるウォーターフロント</p> 

第四章 海洋・地球を総合的に体感させるための展示

4-1 「海洋・地球を総合的に理解する」ための展示の基本的な考え方

【展示コンセプト】

前章までに整理した海洋文化拠点施設の4つの効果と役割の実現を図るために、活動の柱となる展示活動の骨子を検討します。「海洋・地球を総合的に理解する」ために、これまでにない新たな海洋教育の視点を導入した展示コンセプトを掲げ、このコンセプトを基本的な考え方として展示展開を計画していきます。

「わたしと海と地球」のつながりを実感する そのきっかけは、「駿河湾」

生命のゆりかご、海。水の星、地球。

わたしたちは海・地球という大きなシステムの中で暮らしています。

そして「海洋・地球を総合的に理解する」ためには
その「つながり」を実感することが、もっとも大切なことだと考えられます。

地球とのつながりが感じられる深海「駿河湾」を出発点として感じられる
「わたしと海と地球」のつながりを、サイエンスの側面から紐解くと共に
清水が持つ海洋文化の多様な魅力を発信します。

【展示テーマ】

本施設のテーマである「海洋・地球に関する総合ミュージアム」を展示展開していくにあたり、より具体的なテーマとして、次の3つを表現し来館者に伝えていきます。

生命のゆりかご
海・地球

「わたしたちが海・地球という大きなシステムの中で暮らしていることを実感していただくと共に、海・地球への愛着と興味を喚起します。

海と地球と
わたしのつながり

生命・海洋・地球のつながりを「駿河湾」「海洋科学」を通して紐解き、わたしたちの暮らしの中での「なぜ？」という疑問を解明していきます。

さらなる未知への
わたしたちの挑戦

最先端の研究成果がわたしたちの暮らしに深くかかわっていることを知ると共に、さらなる未知の存在を知ること、来場者の探究心をかきたてます。

4-2 展示展開の基本方針

【展示展開の基本方針】

先に掲げた3つのテーマを来館者により効果的に伝えていくため、次の5つのポイントを押さえた展示展開によってコンテンツを紐解いていきます。

■展示展開の基本方針（図表 4-1）

博物館・科学館・ 水族館の融合

海洋・地球を総合的に理解するための世界初の取り組み。

- ・海洋科学と地球科学を中心に、海洋と地球を総合的に理解し生命と海と地球のつながりを実感する展開を導入
- ・分野横断的に「場」を紹介する体験ストーリーを構築

五感で 感じる体験

海洋・地球の多様な価値を、適切な手法で表現します。

- ・コンテンツの伝えたいこと、価値を踏まえた展示を導入
- ・視覚や聴覚での体験に限らない、全身で楽しめる体験を提供
- ・老若男女どのような方でも展示体験に参加できる展開を導入

デジタル技術による 迫力のある体験

スケール感あふれる体験が、本物の価値を伝えます。

- ・海洋 地球の壮大なスケール感を空間を活用して表現
- ・展示に出会った時のインパクトにより来館者の興味を喚起
- ・実物資料展示や生態展示を随所に導入

体験の 自分ごと化

海洋・地球を身近に感じ、考える工夫を盛り込みます。

- ・来場者に身近な視点から解説し「自分ごと」として理解を喚起
- ・体験を持ち帰るためのストーリーや展示手法を導入
- ・日常生活に通じる学びが展示体験の再来性を促進

コンテンツの 顕在化

コンテンツに隠された価値を顕在化し魅力を伝えます。

- ・科学によって解明されたさまざまな価値を顕在化
- ・多様な価値を一般の方々にもわかりやすい表現で紹介
- ・コンテンツどうしの関係性などにも配慮し体験を展開

4-3 展示ストーリー

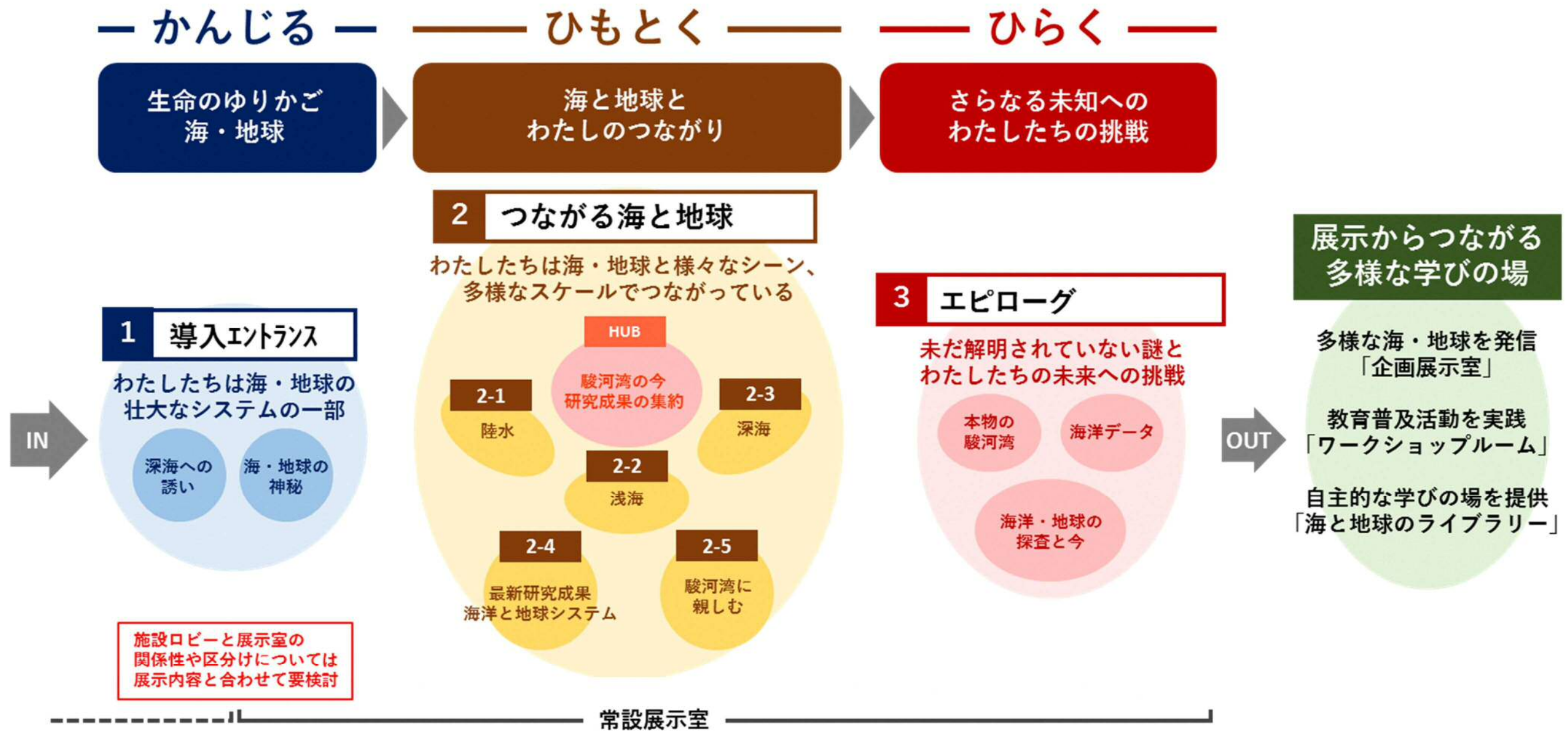
【展示ストーリー】

展示テーマを伝えていくにあたり、学習効果を高めるストーリーに沿った展示展開を図っていきます。

「かんじる」ことからステップを持って展開していく体験が、来館者と海と地球をつないでいきます。また、未知への期待感を持って体験を終えることで再来性を高めることが期待されます。

次節からは、このストーリーに沿って、基本計画としての展示展開イメージを提示します。

■展示ストーリー（図表 4-1）



3-4 展開イメージ

1 導入エントランス

展示の導入空間では、わたしたちを包み込む海洋・地球のシステムを壮大なスケールで描く、没入感のある導入映像演出を展開します。

没入感のある映像体験を提供することで、展示に対する興味を喚起し、来場者の気持ちを切替えていきます。

地球システム（壮大なスケール）の解説は、わたしたちとのかかわりを描くことで親近感を感じさせるものとします。

【展示の概要】

- ・ 展示体験の導入として、来場者の気持ちを切替えるインパクトのある演出を行います。
- ・ 海洋と地球の関係、未知なる世界を探る海洋・地球科学のロマンを描きます。
- ・ 駿河湾の海底映像を使用し、海洋と地球の関係、その大きなシステムを解説します。

■ 展示イメージ（図表 4-2）



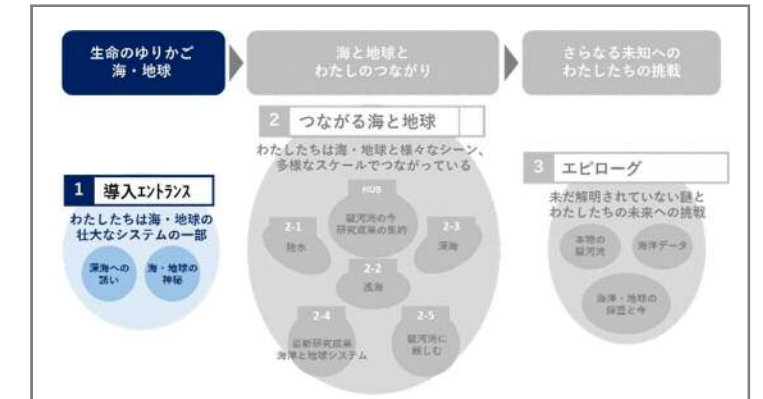
・ 地球儀スクリーン
展示の受付エントランスを抜けて最初に出会う展示にはインパクトを演出します。地球システムの壮大さを伝える地球儀スクリーンなど、わたしたちが地球と海洋と共に生きているのだということを感じさせます。

・ 壁面大型円周スクリーン
海洋、地球や生命、そしてわたしたち人間と、それらのつながりを連想させるような大型映像でテーマである「わたしと海と地球」のつながりをメッセージします。大型の映像とすることで、地球システムの壮大さを描きます。

受付エントランスを抜けて最初のコーナーとなるため、人溜まりができて良い空間を確保することとします。

訴求ポイント

- ・ 没入感のある映像体験を提供することで、展示に対する興味を喚起し、来場者の気持ちを切替える
- ・ 地球システム（壮大なスケール）の解説は、わたしたちとのかかわりを描くことで親近感を感じさせる



2 つながる海と地球

「わたしと海と地球」のつながり、海洋・地球科学の多様な研究成果の相関、を実感いただくため、研究分野にとらわれずに成果を一覧できる、世界初、水族館/博物館のハイブリッド展示※6を展開します。

海洋科学/地球科学にとらわれない総合的な展示が、海と地球のつながりを実感させるとともに、これまでの研究成果を集約する空間を中心に配置することで、周囲の展示をつなぐ役割を担います。

【展示の概要】

- ・駿河湾を軸に海洋・地球科学を分野横断し総合的に紹介します。
- ・成果を集約し、その集大成を表現する「HUB」※7を展示のコアとして位置づけます。
- ・「HUB」の周りには駿河湾のフィールドを紹介する展示が広がります。

【コーナー構成】

中心に位置するハブと周囲の6コーナーで海と地球のつながりを実感させる総合的な展示を展開します。

HUB わたしたちと駿河湾

- * 研究成果を集約し発信する
- * 展示体験のつながりを描く

2-1 駿河湾—陸水

- * 河川等の水族生物を水槽で紹介
- * 上流から下流まで幅広く見せる

2-2 駿河湾—浅海

- * 沿岸の水族生物を水槽で紹介
- * 豊かな駿河湾を印象付ける

2-3 駿河湾—深海

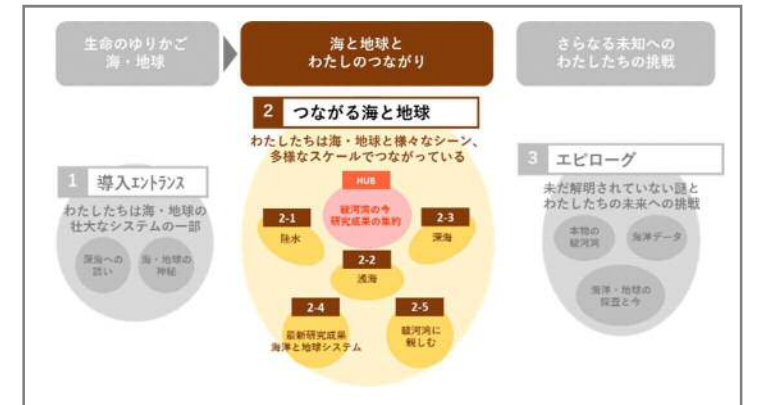
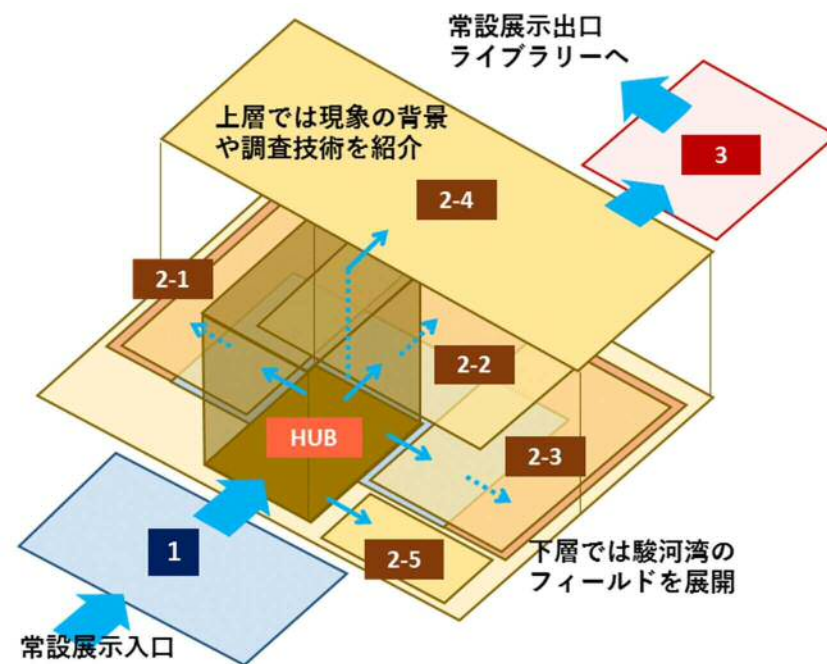
- * 深海の水族生物を水槽で紹介
- * 海底・地球深部について解説

2-4 深海と地球のディスカバリーラボ

- * 駿河湾・地球を調査する機器やシステムを実物を交えて紹介

2-5 駿河湾であそぶ

- * 子供が遊べる駿河湾をモチーフにしたキッズコーナー



※6 「ハイブリッド展示」

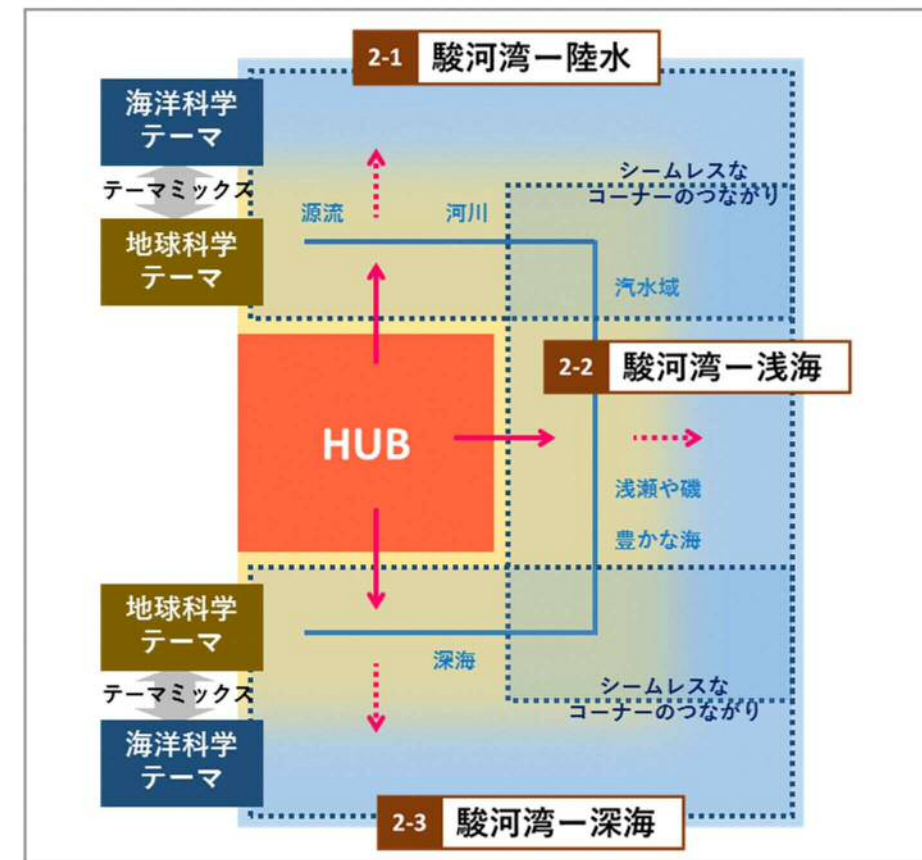
博物館・水族館両方の特色を持った展示

※7 「HUB」

周辺の展示をつなぐ起点・結節点となる展示

水族館/博物館 ハイブリッド展示の考え方

ハブを中心に陸水～深海の「フィールド」がシームレスにつながり、それぞれのフィールドで海洋・地球のテーマのつながりを感じさせる



HUB わたしたちと駿河湾

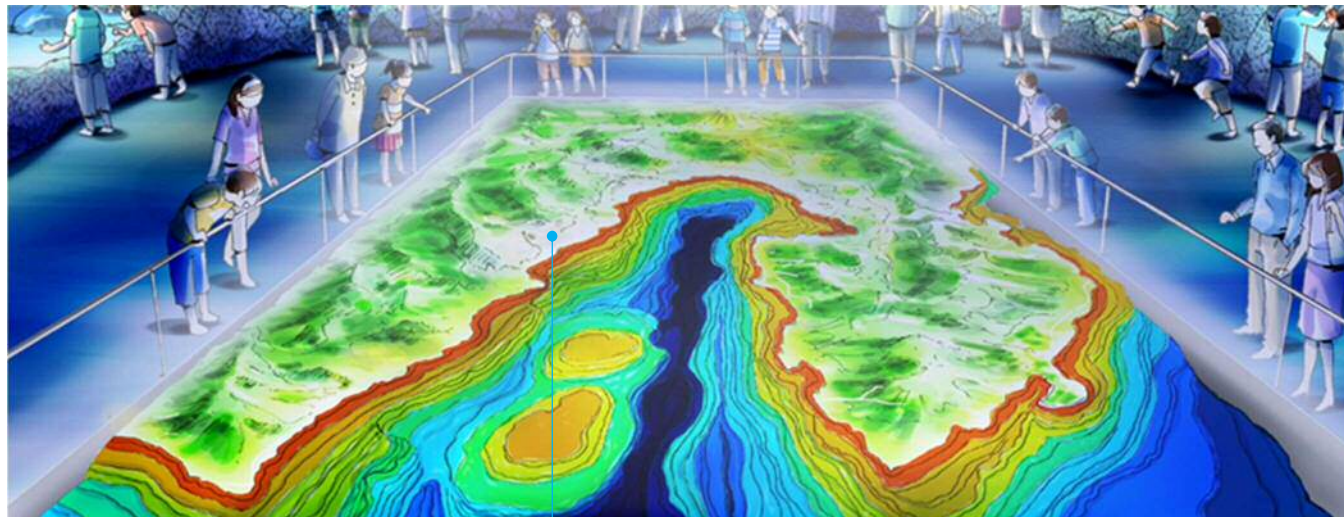
展示体験の導入として駿河湾の成り立ちや現在の様子を紹介し、駿河湾の特異な地形・海を直感的に伝える、インパクトある演出を展開します。

駿河湾の成り立ちについて、駿河湾の地形から解説を紐解くことで、その地形の特徴を感じていただきます。駿河湾を形成する複雑に作用しあう様々な要素、特異な海洋の様子が直感的に理解できる映像演出を行います。

【展示の概要】

- ・駿河湾の形成過程や地形の構造などを、映像・ナレーションを組み合わせで紹介します。
- ・駿河湾を舞台にした 海洋・地球科学に関する様々な研究成果を集約し発信します。
- ・最新の調査研究成果を CG 映像に反映し、進展する駿河湾調査の成果を伝えます。

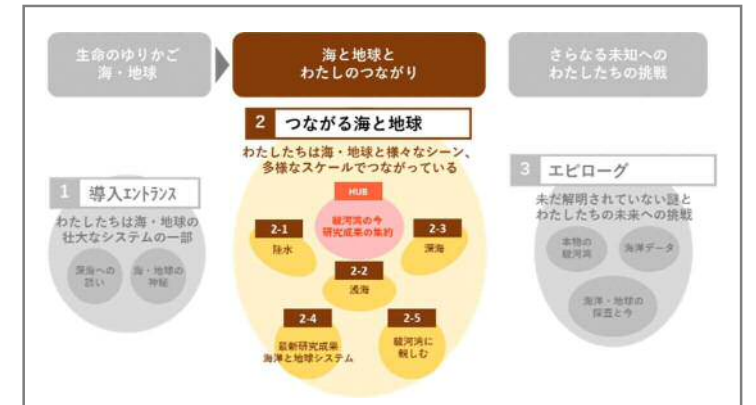
■展示イメージ (図表 4-3)



駿河湾の海底地形を立体的に表現した地形模型に映像を投影するなど地形やその場で起こる現象などが直感的に伝える

【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・駿河湾の形成過程
- ・駿河湾の地形
- ・駿河湾の海水
- ・駿河湾の海底の地層
- ・駿河トラフと地震
- ・駿河湾と海洋資源 など



訴求ポイント

- ・駿河湾の成り立ちについて、駿河湾の地形から解説を紐解くことで、その地形の特徴を感じていただく
- ・駿河湾を形成する複雑に作用しあう様々な要素、その特異な海洋の様子が直感的に理解できる映像演出

■映像展開イメージ (図表 4-4)

	豊かな自然環境	駿河湾の誕生	特異な地形	地形によるめぐみ	謎を解明する科学
展開イメージ					
ジオラマ	富士山や南アルプスからそそぐ多様な自然環境の様子	地殻など海底下の地球の動き駿河湾形成の様子	高低差を表現するために映像によりカラーリング	各所で獲ることができる魚や鉱物等の資源を紹介	数多くのデータが観測されているイメージを投影
解説	わたしたちの住む駿河湾は世界的にも珍しく豊か	駿河湾の謎を紐解くために成り立ちを見てみよう	世界でも稀な急傾斜で深海へつながる特異な地形	豊かな自然環境がわたしたちの生活にも恩恵を与える	わたしたちのためにも最先端科学による解明が重要

2-1 駿河湾—陸水

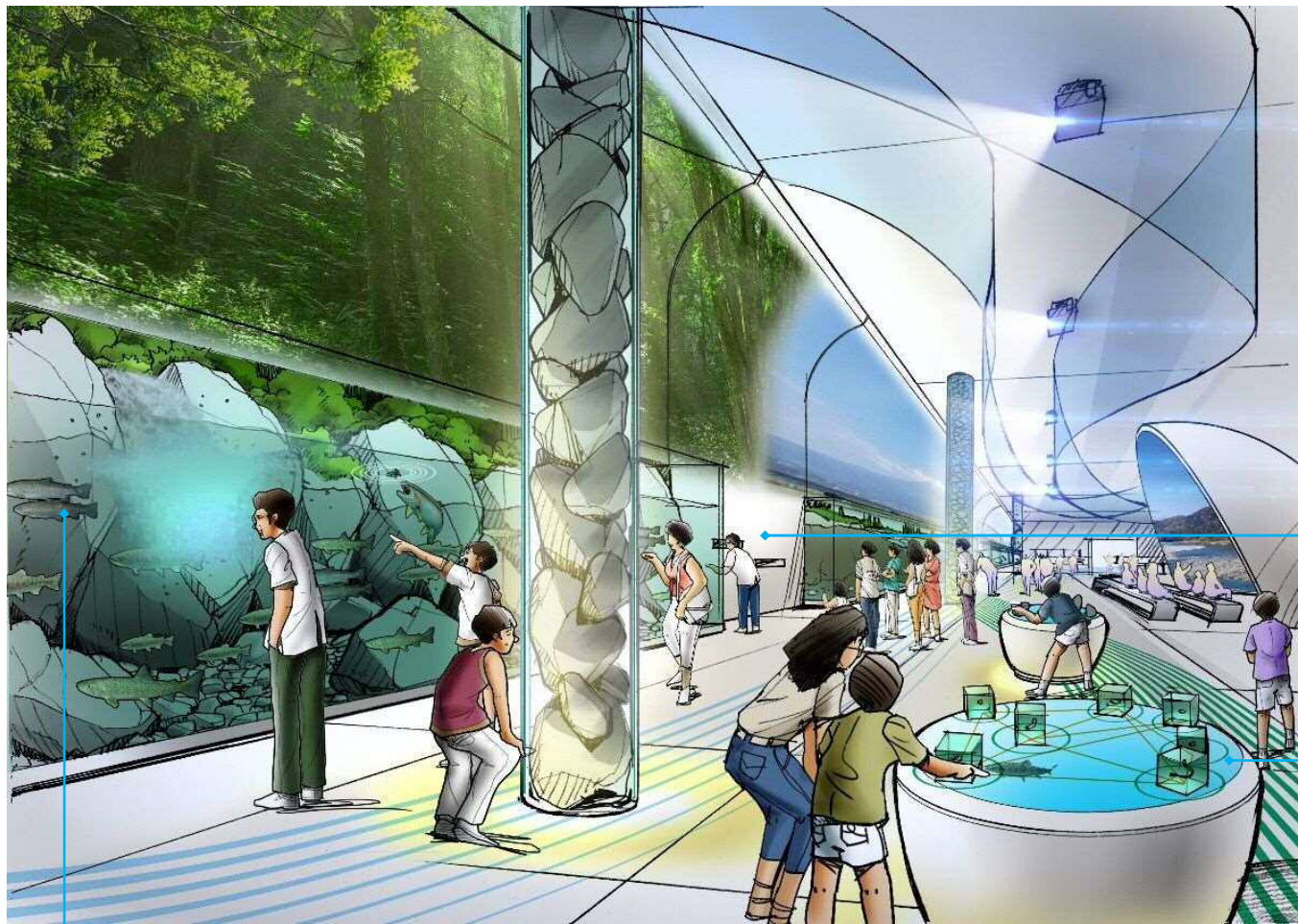
駿河湾の豊かさを支え生態系を生み出す水・生物のつながりと、その背景にある地質・植生などの様子を比較しながら体感できる空間を展開します。

陸水の上流から下流まで一連の流れの中で、それぞれ水族生物や岩石・植生などを比較して見られる構成とすることでテーマの融合をめざします。生態展示については、特に生物の基本情報を伝えるための解説をインタラクティブに展開します。

【展示の概要】

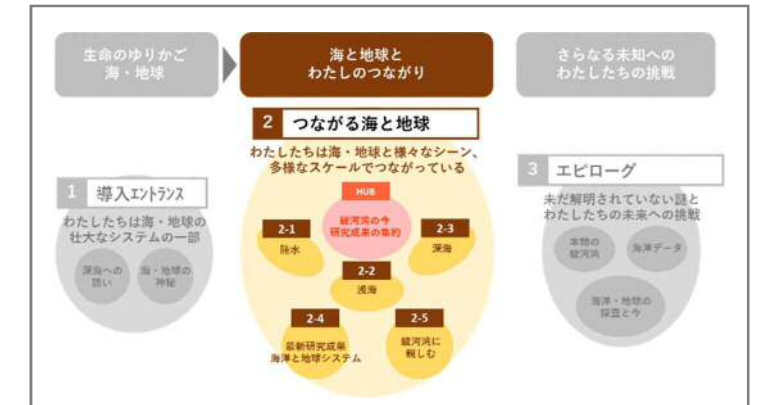
- ・河川に生息する本物の生物を見るだけでなく、陸水での生態系の全体像を示します。
 - ・上流～下流までを見せる水族水槽とあわせて、各場所での岩石や植生も紹介します。
 - ・いくつかの詳細テーマについても深く掘り下げる体験展示を設置します。

■展示イメージ（図表 4-5）



河川の情景や流れなどフィールドの様子を再現した水槽。

さらにその上部には映像が投影、フィールドで実際に起こる現象が再現されることで水槽のフィールドとしてのリアリティを演出します。



訴求ポイント

- ・陸水の上流から下流まで一連の流れの中で、それぞれ水族生物や岩石・植生などを比較して見られる構成とすることでテーマの融合をめざす
- ・生態展示については、特に生物の基本情報を伝えるための解説をインタラクティブに展開する

【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・水族など 生態展示
 - ヤマメ、ウグイ、ヨシノボリ、マス、ナマズ、ウナギ など
- ・海洋科学テーマ
 - 生態系、魚道、河川の栄養、川のみぐみ、わさび、淡水魚と水生昆虫 など
- ・地球科学テーマ
 - 急流な河川、岩石、南アルプス、河川浸食、植生 など

・バイオリギングVR

さまざまな魚の目線で水中の映像を体感できるVR映像。魚ごとの特性や水中での魚の動き、その場所に関する地球科学的な解説などをリアリティを持って体感していただくことで、海洋・地球科学への興味を喚起します。

・食物連鎖モニター

魚とエサとなる水生昆虫などの関係性を、タッチモニターとインタラクティブキューブを活用したデジタル体験で体感。

これらのように、各コーナーにおける展示内容に応じたインタラクティブな参加型展示で海洋・地球科学の魅力を体感的に伝えます。

2-2 駿河湾一浅海

浅い海と人間活動との深い関わりを、大型水槽を中心とした展示でわかりやすく紹介します。

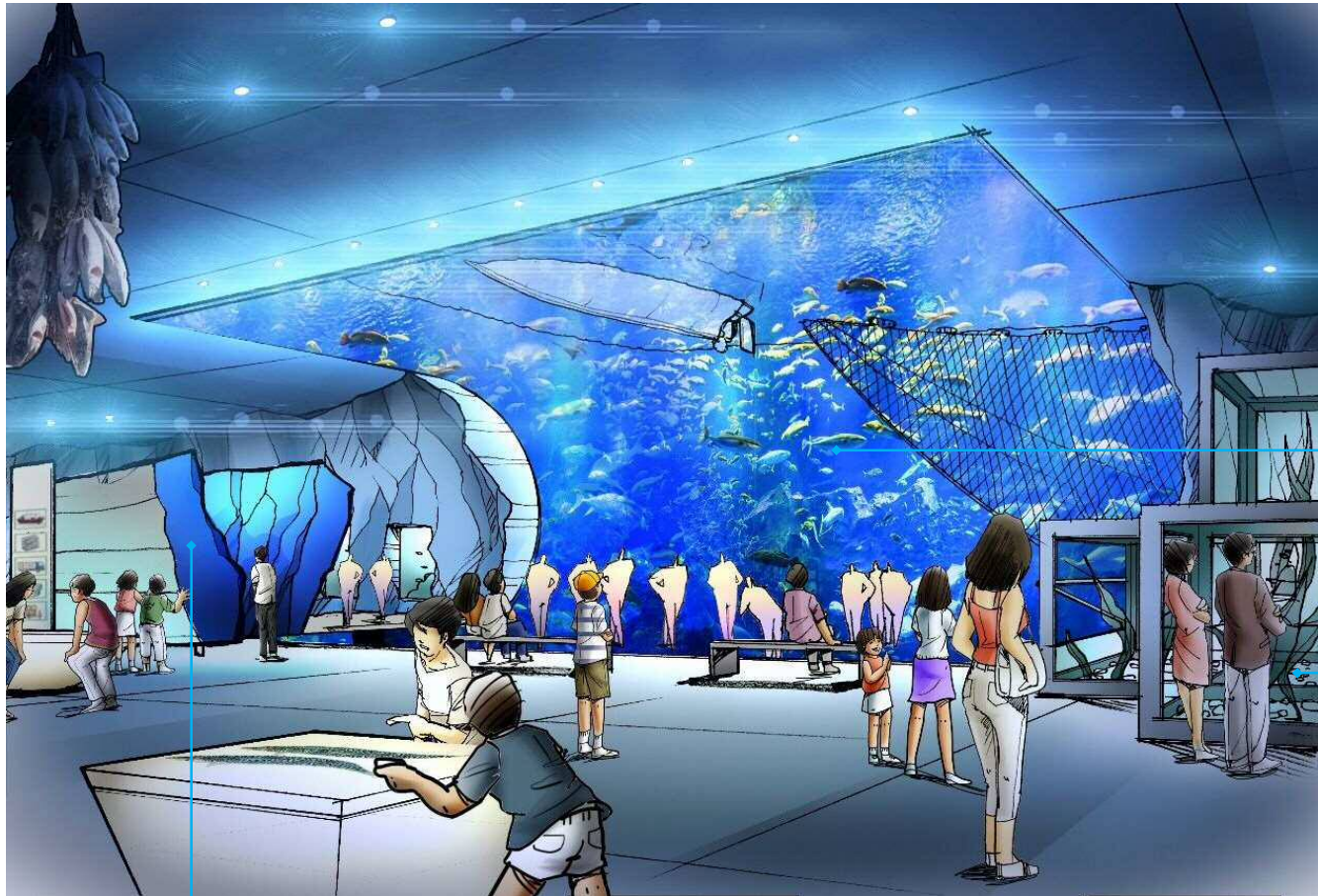
人間活動との関わりにおいて浅い海が重要であることを伝え三保や清水の身近な海への興味を喚起します。

水族は、生き物が棲む環境の様子も合わせて紹介し、生息環境との関連を示し、また、食生活に関連する水族展示や、養殖に関する展示も盛り込み、身近な生活と海の関わりを伝えます。

【展示の概要】

- ・水族などの生態展示は、生き物が棲む環境の様子も合わせて展示します。
- ・「飼育・養殖・繁殖研究」の展示や、一般に食生活に馴染みのある水族を展示します。
- ・絶滅危惧種や希少種に関する展示、物理・化学データの展示も行います。

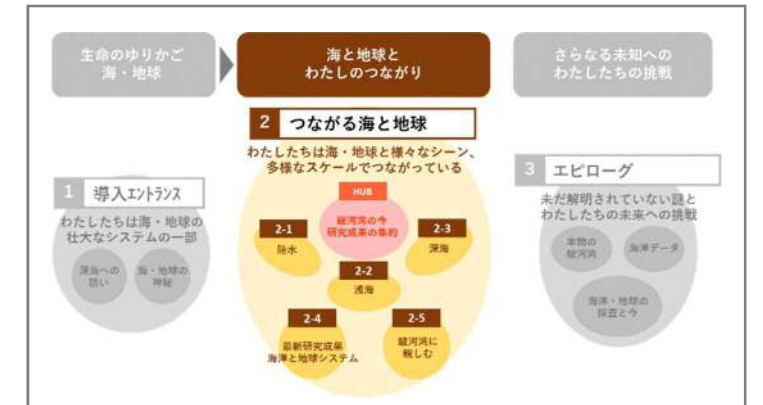
■展示イメージ（図表 4-6）



水塊タッチモデル

海洋の水塊構造について、モデルに触れながら体感的に学ぶ展示。

それぞれの層における水温などは実際にふれて感じられるようなしかけとし、ユニバーサルデザインにも配慮した展示を盛り込んでいきます。



訴求ポイント

- ・「浅い海」が人間活動との関わりにおいて重要であることを伝え三保や清水の身近な海への興味を喚起する
- ・水族は、生き物が棲む環境の様子も合わせて紹介し、生息環境との関連を示す
- ・食生活に関連する水族展示や、養殖に関する展示も盛り込み、身近な生活と海の関わりを伝える

【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・水族など 生態展示
マグロ、キハダ、シイラ、イワシ、マンボウ など
- ・海洋科学テーマ
豊かな駿河湾、清水港と漁場、魚の飼育繁殖、漁業と物流、育てる漁業、磯の生物
- ・地球科学テーマ
伊豆半島の形成、清水の成因、三保の成因、地質と地盤、活断層 など

シンボル水槽「豊かな駿河湾」

豊かな駿河湾を表現する、展示室の象徴となるシンボル水槽。

照明や水槽の形状などの工夫を凝らすことで、魚が本物の海を泳いでいる、来場者にはまるで海に入ったような感覚を与えます。

シーン再現水槽「多様な駿河湾」

駿河湾の浅海にまつわるさまざまなシーン（魚の生息環境）を再現する水槽を複数設置。砂浜、磯などの自然の環境だけでなく、魚礁など人工的な環境も紹介することで、魚を守ることの大切さを訴求します。

入組んだ海岸線や魚礁など、駿河湾における特徴あるフィールドを模した水槽

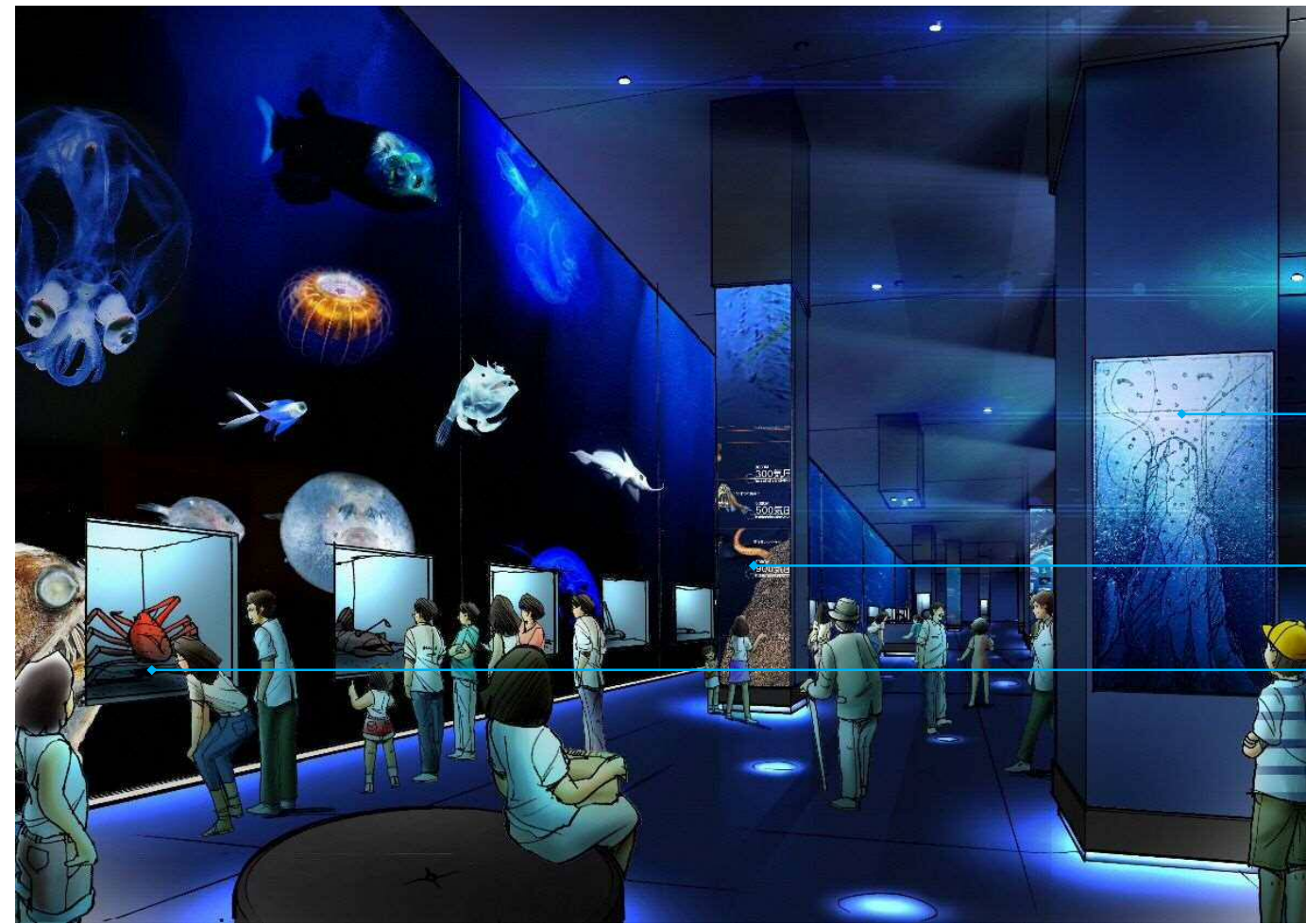
2-3 駿河湾—深海

深海をイメージした演出空間の中で、未知の海洋の不思議や、未来への可能性を訴求します。
 深海はまだ未知の場であるので、来場者も展示物を探りながら体験できるような演出とします。
 深海魚の生態展示は特にその飼育のむずかしさを伝えることも重要なコンテンツとして捉えます。
 生態系全体を理解していただくために地球科学テーマの展示を交えることでテーマの融合をめざします。

【展示の概要】

- ・水槽周辺に各テーマはランダムに配置され、深海・地球深部を総合的に見せます。
- ・特に深海にはまだ解明されていない事実を探っている印象をメッセージするため、手法としても見えていないものを顕在化するような手法を盛り込みます。
- ・深海生物はメンテナンス性にも配慮し壁面水槽とします。

■展示イメージ（図表 4-7）



【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・水族など 生態展示
キンメダイ、サクラエビ、深海サメ、メンダコ、タカアシガニ、ラブカ(映像) など
- ・海洋科学テーマ
深海魚の色(光)、水温、塩分、深海の深さ(距離)、深層水、深層海流 など
- ・地球科学テーマ
駿河トラフ、熱水鉱床、生命の起源、海底資源、原始の海洋、鯨骨生物 など

熱水鉱床モニター

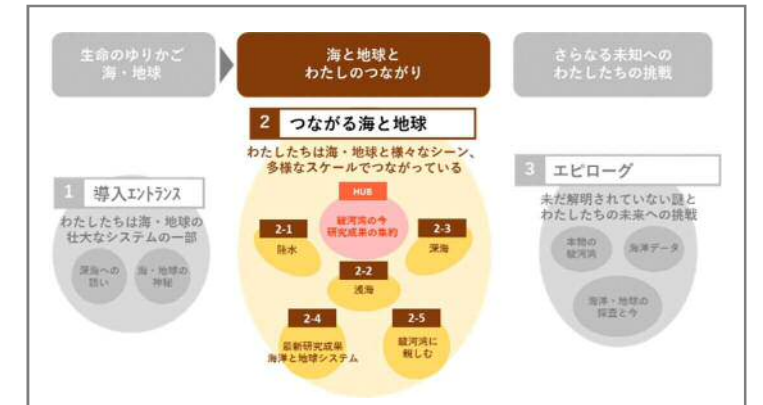
熱水鉱床のモデルと半透明のモニターが重なり、熱水鉱床周辺の環境や生物について解説が見られる。まだ解明途中の研究についてはデジタル展示とすることで、今後の更新性に配慮する。

深海生物デジタル図鑑

タッチモニターをさわって、海の深さを変えながら閲覧することができるデジタル図鑑。

水槽とデジタル技術の融合 水族展示と地球科学展示の融合

水槽を壁に並べるだけでなく、その中の一部には、水槽かと思って見ていると実はモニターで、海底の様子など地球科学に関連する解説を提供するというようなしなやかさを盛り込むことで、さまざまな方に水族展示だけでなく地球科学展示にも興味を持ってもらえるような新たな取り組みを実施します。



訴求ポイント

- ・深海はまだ未知の場であるので、来場者も展示物を探りながら体験できるような演出とする
- ・深海魚の生態展示は特にその飼育のむずかしさを伝えることも重要なコンテンツとして捉える
- ・生態系全体を理解していただくために地球科学テーマの展示を交えることでテーマの融合をめざす

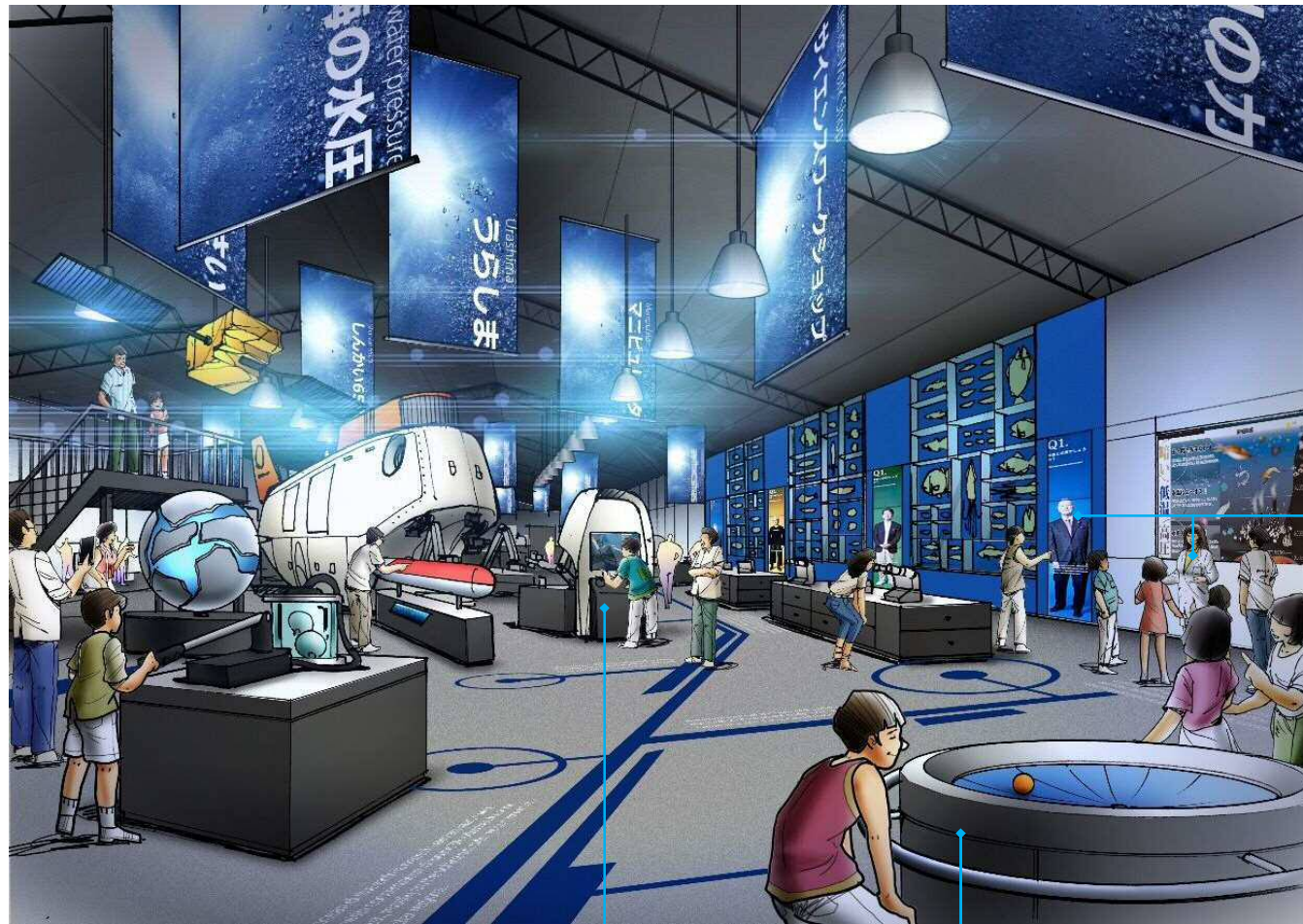
2-4 深海と地球のディスカバリーラボ

駿河湾を中心とした最先端の海洋調査の内容をリアルタイムデータも含めて多彩な展示メディアで紹介します。さらにその調査をどのように行っているのかを、実際の探査・測定機器や、それらの模型を活用し解説すると共に、海をテーマにした様々な実験・観察やワークショップを用意し、研究者や専門家とも対話できるラボを設けることで、来場者のさらなる研究意欲を促します。

【展示の概要】

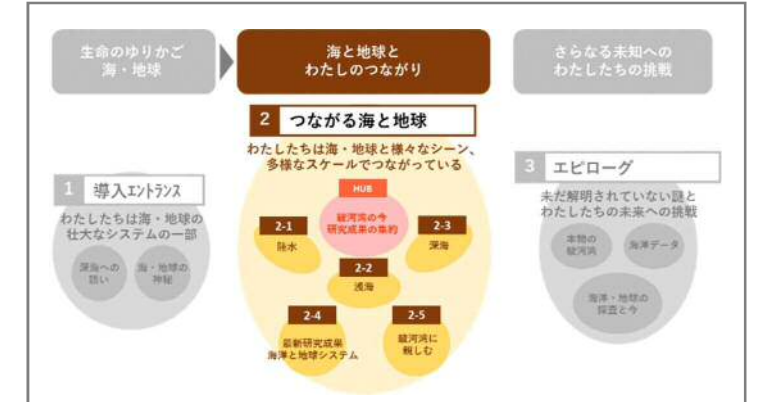
- ・海洋調査のリアルタイムなデータや、深海掘削のサンプルなどで興味を喚起します。
- ・海に関する事象について、研究者や専門家とコミュニケーションできる機能も導入。
- ・断層や地震などの防災に関わるコンテンツも取り上げて展示します。

■展示イメージ（図表 4-8）



デジタル素材を活用した
シミュレーターなどの体感展示

海洋・地球で起こる現象の原理
などを体感的に理解できる展示



訴求ポイント

- ・JAMSTEC や東海大の最先端の海洋地球調査の内容やデータを多彩なメディアで表現する
- ・映像などのデジタル素材を積極的に活用することで、現在の研究の様子をリアルタイムで紹介する
- ・地球上で起こる様々な現象を紐解く科学体験や、コミュニケーターとの対話の場を設置

【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・海洋や地球にかかわるさまざまなシステム・原理
- ・わたしたちの生活にかかわる災害とシステムの関係
- ・海洋に関する実験・観察プログラム
- ・研究者とのバーチャルトーク・Q&A
- ・深海探査のリアルタイムデータ・ケーブル観測網
(断層や地震の観測データ、河口断層帯の3次元構造など)

対話により興味を喚起する展示

本物のサイエンスコミュニケーターや、デジタルの研究者などと対話することができるコーナー。対話をきっかけに、展示への興味を喚起するだけでなく、来場者のさらなる探究心をかきたてます。

さまざまな研究機関の素材を活用した最先端の展示

JAMSTEC をはじめとした連携先の研究機関の学術コンテンツを紐解き展示化。

最新の研究成果をPRする場としても活用していただくことを想定し更新性には特に配慮します。

2-5 駿河湾で遊ぶ

駿河湾や深海をモチーフにしたワクワクの体験型展示空間で楽しく遊びながら身近な海の不思議を探求します。海の世界観を感じる演出や体験型の展示手法により、幼児や低学年に海への興味をもつきっかけをつくります。駿河湾や海洋調査などの内容を楽しい展示として構成することで、遊びながら海の科学への気づきを促します。

【展示の概要】

- ・駿河湾や深海をモチーフに、難しい海洋のテーマを楽しい体験型展示で表現します。
- ・海に興味を持ってもらうことを第一義に、気づきや発見を促す展示を導入します。
- ・親子で一緒に楽しめる展示を導入し、学び合いによる理解促進を図る展示とします。

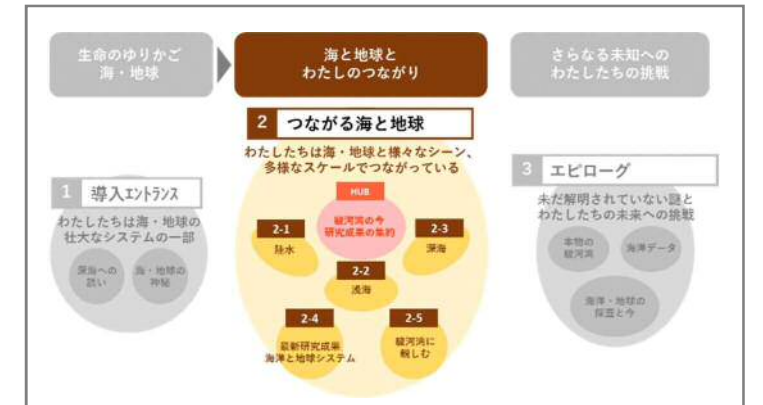
■展示イメージ（図表 4-9）



子供用 海底探査シミュレーター

深海探査を模擬的に体験できるようなデジタルシミュレーターを設置。

誰でも楽しく海底探査で遊べるゲームを導入し、海洋への敷居を下げ、子供たちの興味を惹きます。



訴求ポイント

- ・海の世界観を感じる演出や体験型の展示手法により、幼児や低学年に海への興味をもつきっかけをつくる
- ・駿河湾や海洋調査などの内容を楽しい展示として構成することで、遊びながら海の科学への気づきを促す。

【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・海のみみつやふしぎ
- ・身近な海「駿河湾」
- ・海の生き物たち
- ・海を調べる乗り物
- ・深海のふしぎ
- ・海の生き物に触ってみよう

デジタル水族館

自分でお絵かきした水族がデジタル化され壁面を泳ぎ回る映像展示。海への愛着を醸成します。

フォトスポット

SNSに写真をアップロードしたくなるような、家族で写真が撮れるスポットを用意します。

タッチプール

水族にさわって親しむことができる展示。駿河湾の砂浜をイメージし生物などを選定します。

海を意識した楽しい空間づくり

子供たちが楽しく生みに親しめるような、空間全体を活用した世界感づくりをめざします。

3 エピローグ（展示室出口）

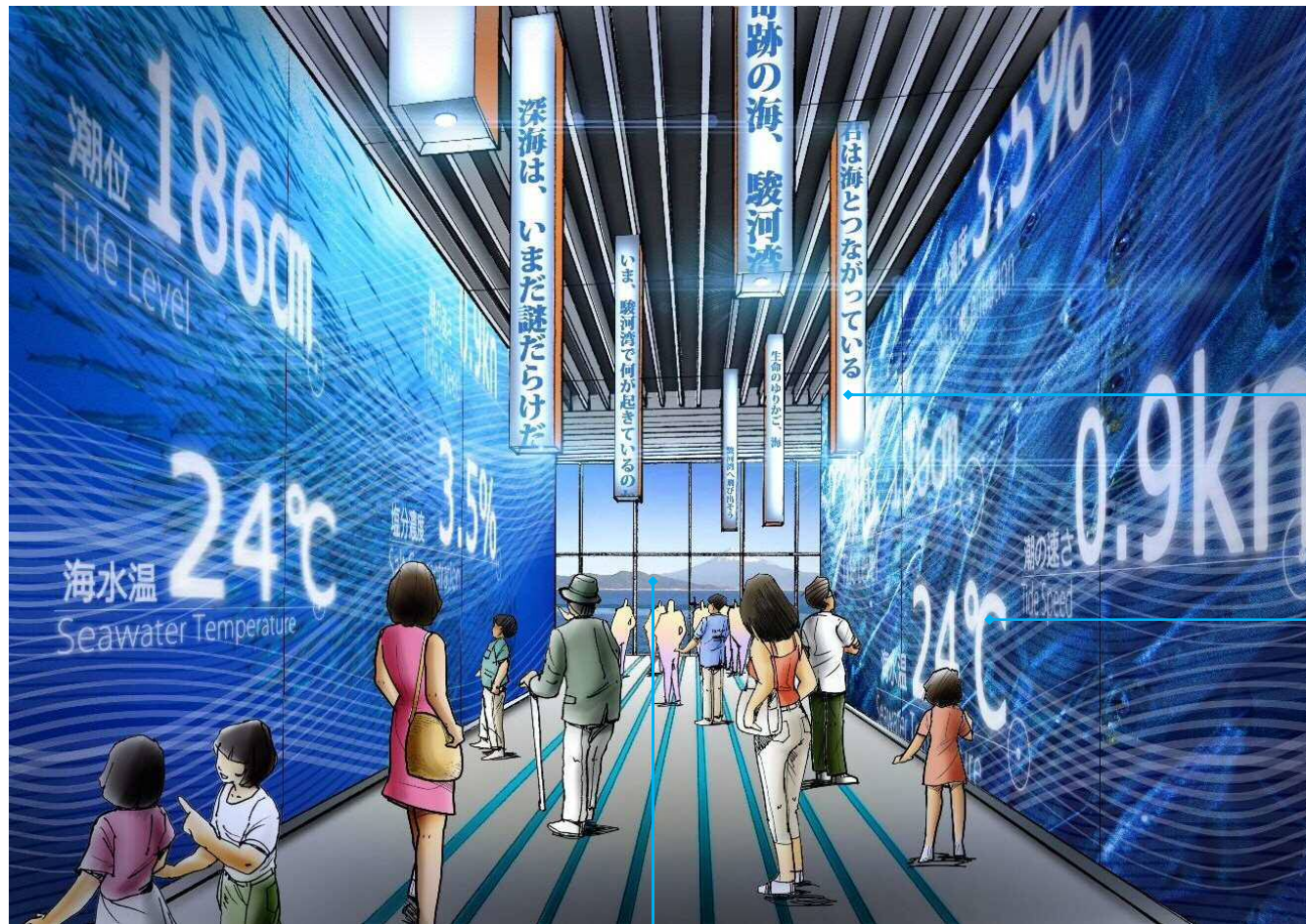
まだまだ未知に包まれた駿河湾のリアルな姿を体感し、研究者と共に更なる探求への一步を踏み出す未来への道をイメージした空間を構成します。

この瞬間にも「海が変化し続けていること」を感じられるメッセージ性の高い、展示のまとめともなり、リアルタイムデータや最新研究、これからの課題を共有し、海の未来・ロマンを伝える場でもあります。

【展示の概要】

- ・駿河湾のリアルタイムデータに包まれるような演出空間を形成します。
- ・まだまだ解明されていない謎の多さ、その謎への研究者の想いを感じさせます。
- ・本物の駿河湾を望むことで更なる探求への期待感を醸成します。

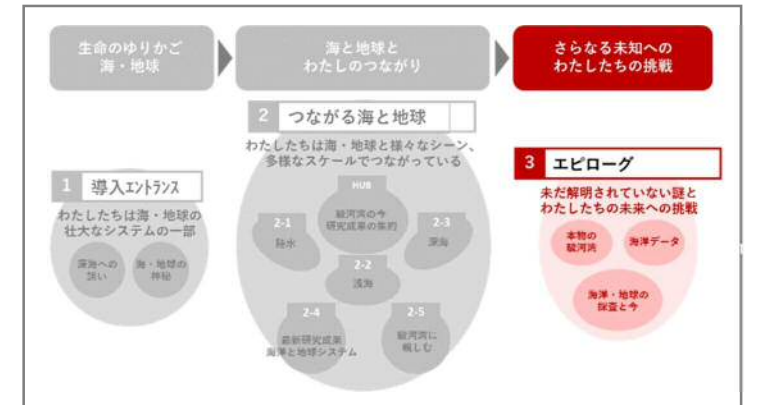
■展示イメージ（図表 4-10）



窓から見える本物の駿河湾

展示室の出口は本物の駿河湾が見えるような配置とします。

体験の最後に本物の駿河湾を見せることで、自分なりの駿河湾に対する想いを感じていただくと共に、未来の駿河湾を考えるきっかけを提供します。



訴求ポイント

- ・この瞬間にも「海が変化し続けていること」を感じられるメッセージ性の高い、展示のまとめ
- ・リアルタイムデータや最新研究、これからの課題を共有し、海の未来・ロマンを伝える

【展示で扱う項目・コンテンツの例】

- ・駿河湾のリアルタイムデータ
波の高さ、海流の流速、海水の塩分、海水の温度、漁に出ている漁船の数など
- ・研究者の取り組む課題
- ・研究者の想い

解明されていない謎や研究者の想い

いまだ解明されていない海洋や地球に関する謎、その謎に対する研究者の想いやメッセージを来場者に問いかけるデジタルボード。

さまざまな言葉が流れ、展示室を出る来場者の気持ちをさらなるロマンへと導きます。

リアルタイムデータ メディアアート

駿河湾のさまざまなリアルタイムデータを活用したメディアアートウォール。

刻一刻と変化する駿河湾を全身で感じさせるとともに、駿河湾の現在の様子を印象付けます。

第五章 海とつながる施設をめざして

5-1 建設候補地と諸条件

本計画において施設の建設候補地は、基本構想における条件を最も満たし、本計画における内容を実施するにふさわしい日の出町における図中の土地とします。候補地においては現状民有地であるものを、本市が取得することをめざしていきます。

また、候補地周辺においては、清水港港湾計画や清水都心ウォーターフロント地区開発基本方針などの全体計画によるコーディネートのもと、官民の様々な主体が行う事業を通じて、海洋に関連する様々な活動・機能呼び込むなど、地区全体での一体的な空間づくりが求められています。

そのため本施設の検討にあたっては、今後の日の出地区全体の開発方針を踏まえた施設像を描くべきであり、下記の「施設計画の基本方針」にあげる項目については特に考慮しなければならないと考えられます。

■建設候補地 図表 (5-1)



【敷地利用の条件】

- ・用途地域：工業地域
- ・建蔽率：60%
- ・容積率：200%
- ・地区計画：なし
- ・高さ制限：19m（但し、臨港地区内建築物は適用除外）
- ・接道状況

名称	延長	車道幅員
日の出埠頭1号道路	765.70	13.3
日の出埠頭2号道路	583.20	10.0
日の出埠頭6号道路	200.50	13.2
日の出埠頭9号道路	345.50	6.5

5-2 国際海洋文化都市・清水を象徴する施設の基本的な考え方

本施設の施設内容については「海洋・地球に関する総合ミュージアム」をめざすため、また、誰もが入館しやすい施設としていくための仕掛け・空間づくりを行います。さらに清水・駿河湾への愛着、日の出地区全体でのにぎわいを創造するための機能を備えます。

(1) 周辺環境との調和・連携を生み出す

- ・日の出地区に現在備わっている、今後設置される予定である施設や機能との調和・連携を意識した敷地利用とします。
- ・主に「清水駅方面からの回遊者」「クルーズ客船利用者」の利用に配慮した動線計画とすることで、日の出地区における回遊性を向上し、施設単体ではなく、地域全体での滞在時間を伸ばすような計画を検討します。
- ・周辺施設との関係性がわかり、面でのつながりを生み出すような標識・サインなどの誘導案内についても検討し、訪れやすい施設をめざします。

(2) 清水ならではの景観を活かした特徴をつくる

- ・施設のメインテーマである海洋を身近に感じられ、駿河湾への愛着を持っていただくための諸室配置や仕掛けを盛り込みます。
- ・富士山や日本平など「地球」の壮大なスケールを感じるような景観を望むことができる場を設けます。
- ・クルーズ客船で清水港を訪れる方たちにとって、訪れたいようなアイキャッチになるなど、外観でも魅力・特徴を持つ施設をめざします。

(3) 教育普及活動・常設展示を中心とした、ミュージアムとしての性格を考慮する

- ・施設の機能の大部分を占める「教育普及活動」「常設展示」と、その他機能とが有機的につながるように諸室を構成・配置します。
- ・展示に係るバックヤードや設備など管理のための空間を十分に確保することで、施設のスムーズな活動を促します。
- ・展示や生物の飼育を担うミュージアムとして、無理なく長く使い続けられるだけでなく、将来的な活動の発展などに対応できる施設とします。

(4) 利用者・運営者共に安全・快適に利用できる環境づくり

- ・ユニバーサルデザインに配慮し、高齢者や障がい者を含めたすべての利用者が安全で快適に利用できる施設をめざします。
- ・地震をはじめとする多様な災害に十分な耐性を備えることとします。
- ・観光客や学校などの団体利用時に必要な諸室やスペースの確保に配慮すると共に、利用者が清水の魅力にふれながらくつろいで過ごせるよう、心地よい空間づくりをめざします。

(5) 環境にやさしく維持管理が容易な施設づくり

- ・エネルギーを無駄に消費せず、環境への負荷が少ない施設デザインや設備を採用することで、海洋・地球の総合ミュージアムとしてふさわしい計画とします。
- ・施設の建設においては、合理的・効率的な構造・仕様となるよう設計段階で十分検討するとともに、施設の維持管理を適切に行えるよう、長寿命化や修繕費を含むライフサイクルコストの軽減をめざします。
- ・施設の維持管理を計画的かつ容易にするために、可能な限りランニングコスト低減に配慮した計画とします。

■敷地にかかわる施設設計に向けたポイント 図表 (5-2)

1 施設の顔となる面への工夫

- ・日の出地区を回遊する来場者のメイン動線は清水駅方面となることが想定されるため、施設の顔が西向きとなると考えられる。
- ・施設の顔となる部分の演出や、来場者が溜まるスペースに配慮する。

2 クルーズ船客への動線確保

- ・東側岸壁からの動線が想定されるクルーズ船客の施設へのアクセスを容易にする工夫を検討する。
- ・防潮機能を兼ねた緑地整備も別途計画されているため、この計画との整合性を綿密に図る。

3 海とつながる施設デザイン

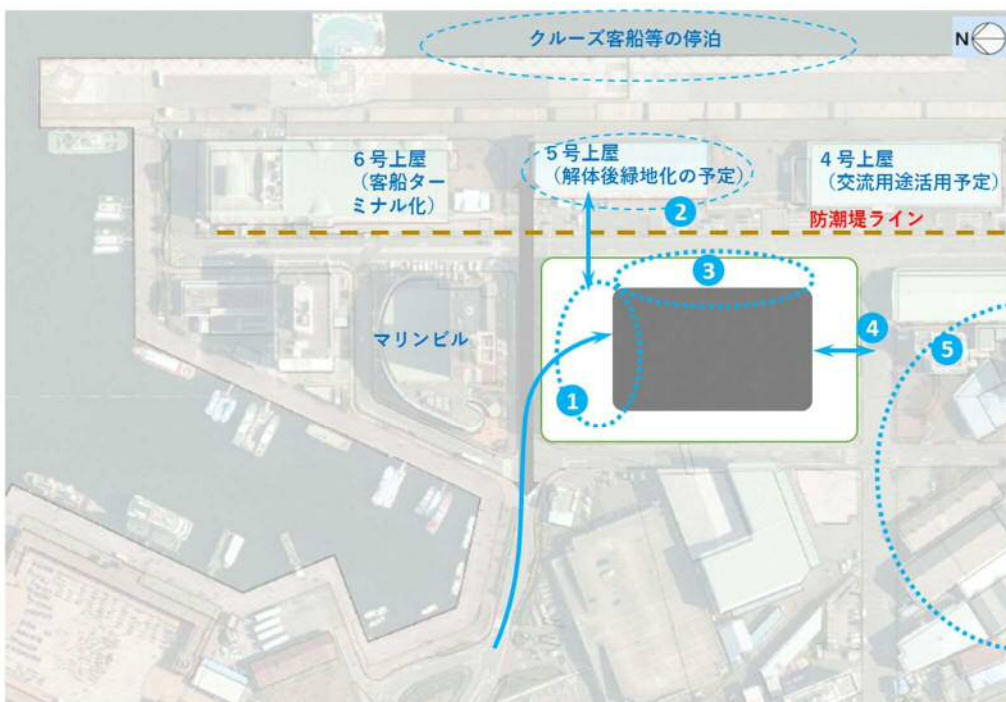
- ・目の前に広がる駿河湾等の環境との一体感を感じられる施設をめざす。
- ・さらには施設からも駿河湾や富士山を望むことが期待されるため、施設内にもビューポイントを設けるなどの工夫をする。

4 バックヤード動線の確保

- ・来場者の動線に配慮すると共に、運営者にも配慮し、適切なバックヤード動線や搬入口を確保する。
- ・大型の車両による搬入なども想定されるため、来場者への安全に配慮し、施設南側に主な動線を設けることが望ましいと考えられる。

5 日の出地区の周辺開発との調整

- ・日の出地区における本施設の周辺では、民間事業者による開発も含めさらなる面での展開が期待される。
- ・このような開発の動向も踏まえ、動線・サイン計画や施設デザインを検討することとする。



5-3 教育普及・展示を中心とした機能構成と諸室の必要面積

本施設の施設構成については、主に「交流エリア」「展示エリア」「教育普及エリア」「研究連携エリア」「バックヤードエリア」「事務管理エリア」を備えます。以下ではそれぞれの機能の概要、それらに必要と考えられる規模や諸室、設備について整理することとします。

(1) 各エリアの考え方

【交流エリア】

- ・多様な利用者だれもが気軽に訪れることができ、何度でも訪れたくなるよう仕掛けを備えるように工夫します。
- ・利用者どうし、利用者と運営者、施設を訪れる研究者などが自由に交流し対話が生まれ、さらに関連団体や周辺施設との連携や共創活動など多彩な交流創造を積極的に促すような開かれた場としての役割を担います。
- ・清水港周辺において海洋・地球にかかわる国際会議をはじめとした MICE などが開催された場合にはユニークベニューとしての活用を見込むなど、多様な活動・プログラムが開催可能な規模・設備を備えます。
- ・諸室を有機的につなぐ空間として、その配置、関連エリアとの動線については、それぞれの場での活動の内容を十分考慮したものとします。

【展示エリア】

- ・展示エリアの中でも「常設展示」、「特別展示」、「映像シアター」など複数タイプの展示室を設けることが想定されるため、それぞれの内容や特性を踏まえた施設環境を整えます。
- ・特に「常設展示」については水槽を有するため、関連諸室や設備との連携について十分に配慮し計画することとします。
- ・室内の動線については、混雑時を考慮したうえで、車いすの利用者も容易に観覧可能なように展示どうしの距離を十分に確保するなど、ゆったりと利用可能な空間とします。
- ・部分的なりニューアルや、将来的な改修を見込み、展示替えが容易にできる展示空間を検討します。

【教育普及エリア】

- ・将来的な活動の広がりも踏まえ、多様な活動プログラムに必要と考えられる機能や設備を十分に検討します。
- ・いくつかの団体が同じタイミングで別々にプログラムを実施可能なように、複数の部屋、設備を検討します。
- ・展示と連携した活動が実施しやすいように動線など諸室の連携に配慮します。

【研究連携エリア】

- ・運営主体において専門の研究者が常駐するわけではありませんが、JAMSTEC や東海大学など研究機関、研究者との連携による幅広い調査研究活動に対応した諸室、設備を持つ施設と

します。

- ・市民・利用者との協創などの活動プログラムにおいて活用可能な諸室、設備を備えます。

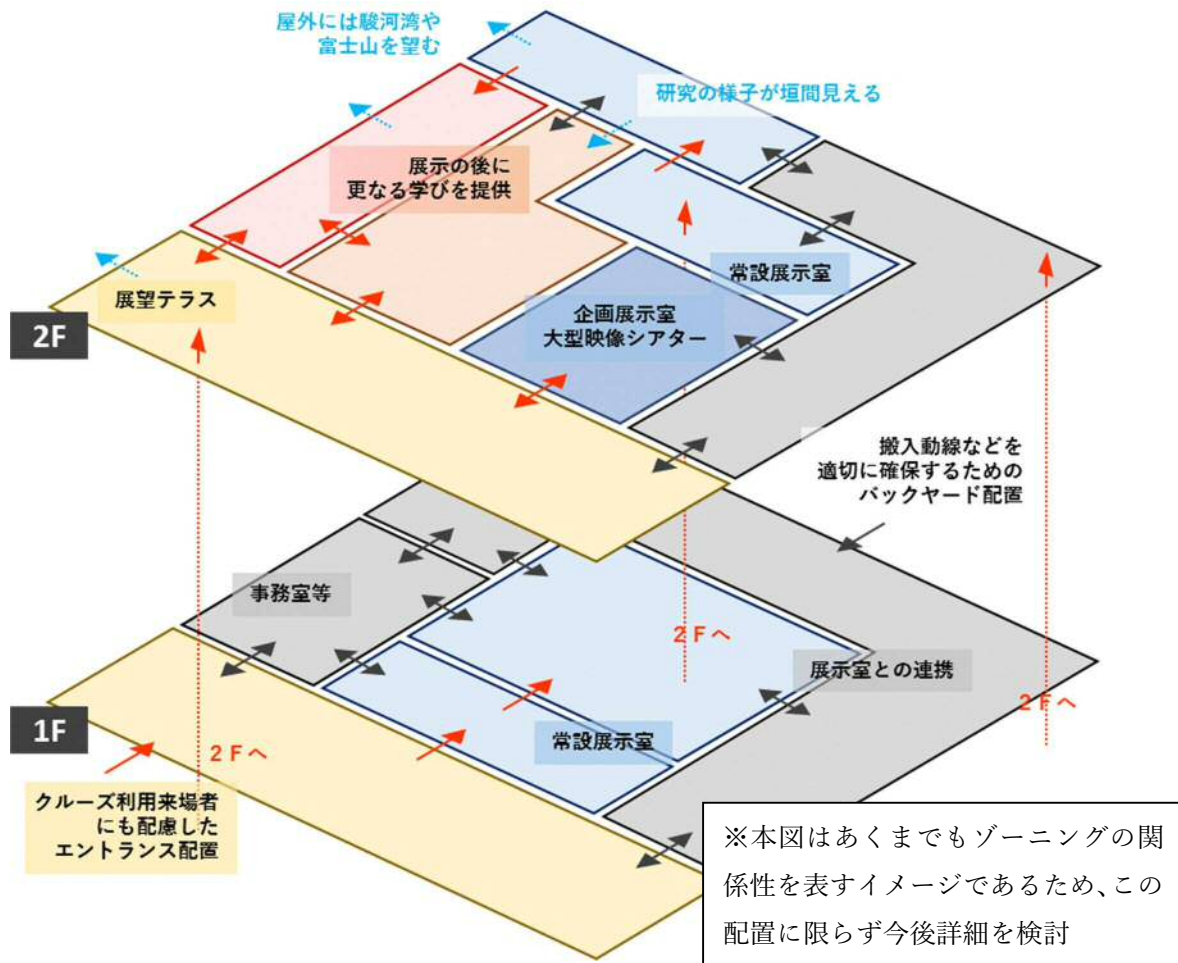
【バックヤードエリア】

- ・展示の対象となる貴重な資料や生物を安全に保全・飼育し、次代へ生かすという、ミュージアムとしての基本的かつ重要な機能を備えます。
- ・場合によっては展示やプログラムの中で利用者に公開することも踏まえ、動線や配置にも配慮します。
- ・将来の収蔵資料の増加への対応も考慮します。
- ・収集・保全・飼育活動における利便性や効率性を確保できるよう設備や配置に配慮します。

【事務管理エリア】

- ・運営者と利用者の動線ができるだけ重ならないように配慮することで、両者にとって快適な配置を検討します。
- ・それぞれの諸室と容易にアクセス可能なようにするなど、運営が効率的になるように、諸室の連関に配慮します。

■各エリアの関係性とゾーニングイメージ 図表 (5-3)



(2) 諸室の構成・連関

本施設の施設規模は延べ床面積 10,000 m²程度とします。その中で各機能に求められる内容、活動計画を踏まえ、以下の諸室構成・面積とすることが想定されますが、それぞれの詳細や面積配分については、今後、建築設計を進める中で引き続き検討していくこととします。

■ 諸室構成（案）（図表 5-4）

室名	概要	面積
交流エリア		
エントランスロビー	<ul style="list-style-type: none"> 施設の玄関口、来訪者を迎え入れる空間として開放的で親しみを持つことができる空間とする。 さまざまな諸室をつなぐ空間となる。 MICE 対応などイベント時には大空間として活用できるような機能を有することとする。 	約 1700 m ²
ミュージアムショップ	<ul style="list-style-type: none"> ミュージアムのオリジナルグッズや関連グッズ、その他刊行物などを販売する。 観光客向の立ち寄りにも配慮し、入口からアクセスしやすい配置を検討する。 	
飲食・休憩スペース	<ul style="list-style-type: none"> 簡易的な飲食や休憩が可能な空間。 団体バスなどの来場時に対応可能なように 100 名程度の席数を最低限確保する。 	
屋外テラス	<ul style="list-style-type: none"> 屋外で外の景観を楽しむことができるテラス。 駿河湾や富士山を望むことができるような眺望を確保する。 	
キッズスペース	<ul style="list-style-type: none"> 子供が自由に遊ぶことができる小さな遊び場。 玩具や図書など遊び道具が備えられている。 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> 風除室、授乳室、ロッカーなど 	
展示エリア		
常設展示室	<ul style="list-style-type: none"> 駿河湾や地球とわたしたちのつながりを紹介し海洋・地球科学にふれる展示室。 各種資料展示や体験装置、水槽による水族展示を展開。 学校の社会科見学や遠足、クルーズ客などの団体来場にも対応できるように動線は広く確保し、ゆったりと展示を見られるスペースを確保する。 特に水族展示にかかわる空間は休憩スペースや座って展示を見るスペースの確保に配慮する。 基本的には入場料を徴収する空間とする。 	約 3400 m ²
企画展示室	<ul style="list-style-type: none"> 海洋・地球にかかわるテーマについて期間を区切った企画展示を展開する。 	

	<ul style="list-style-type: none"> ・館でのオリジナル企画展や他館からの巡回企画展示を開催することを想定する。 ・関連研究機関の研究発表や、イベントなどを通じて海洋産業の振興にも寄与することをめざす。 ・常設展示とは別途入場料を徴収することも検討。 	
映像シアター	<ul style="list-style-type: none"> ・100~200名程度が一度に体験可能な大空間での迫力ある映像を展開するシアターとする。 ・着座型のシアターとし、上映時間を一定時間確保し入れ替え制での運用を検討する。 ・海洋や深海をテーマとした映像を投影することを考慮し、高精細映像が投影可能な設備を設けると共に、複数壁面に対する映像投影など臨場感を演出できる設備の導入を検討する。 ・常設展示とは別途入場料を徴収することを検討する。 ・館で制作された映像の他に、一般の方などが制作した作品のプレゼンテーションやイベントへの貸し出しを可能とする柔軟な活用を検討することで、稼働率の向上をめざす。 	
教育普及エリア		
ライブラリー	<ul style="list-style-type: none"> ・海洋や地球をテーマとした資料、書籍、映像を中心とした様々なメディアを閲覧可能な空間。 ・閲覧時には数時間程度は滞在可能なような空間や設備を設置することを検討する。 ・導入するメディアについては展示との連携を視野に入れることで相乗的な利用を促す。 	約 500 m ²
ワークショップルーム	<ul style="list-style-type: none"> ・来場者向けに実験や工作などさまざまなワークショップの実施や、実験・実習型の講座などを開催することが可能な空間。 ・水や火を用いたプログラムなど、多様な活用が可能な設備を導入する。 ・複数の室を用意することで、多様な活用が可能なように配慮する。 	
研究連携エリア		
オープンラボ	<ul style="list-style-type: none"> ・展示開発や生物の飼育研究のための空間。 ・研究者が常駐して日常的に研究を行うわけではなく、職員との共働によりイノベーションを促すための空間として活用するため、設備などについても配慮する。 	約 400 m ²

	<ul style="list-style-type: none"> ・共働の様子が来場者から見える、展示室から見えるなど、オープンな空間とする。 	
プレゼンルーム	<ul style="list-style-type: none"> ・連携する研究者や団体と職員とのミーティングや、職員どうしの内部ミーティングにも活用可能なスペース。 ・複数に部屋を区切って使えるように配置などに配慮する。 	
バックヤードエリア		
資料収蔵庫	<ul style="list-style-type: none"> ・バックヤードエリアについては、常設展示室と同程度程度のスペースを確保し、将来的な設備変更や収蔵資料の増加についても対応可能な配置などを検討する。 ・予備水槽や水族飼育設備については、今後の設計において具体的な内容を決定していくこととするが、東海大学海洋科学博物館の設備との連携を検討する。 ・資料収蔵庫や展示準備室については、資料保護に適した一定の温湿度管理が可能な空間とする。 ・バックヤード動線については来場者動線と区別するよう適切に配置する。 	約 3000 m ²
水族飼育・治療室		
水槽維持装置		
予備水槽		
展示準備室		
荷解室		
事務管理機能		
館長室	<ul style="list-style-type: none"> ・館長の執務室。 	約 1000 m ²
職員執務室	<ul style="list-style-type: none"> ・常勤・非常勤職員の執務室。 ・諸室とのつながりや動線に配慮する。 	
コミュニケーター控室	<ul style="list-style-type: none"> ・展示解説などを担うコミュニケーターの控室。 ・簡易的な行為や荷物置きが可能な設備を持つ。 	
警備員室	<ul style="list-style-type: none"> ・警備などセキュリティにかかわる室や救護室。 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・便所、更衣室、シャワー室、廊下、階段、エレベーターなど 	

(3) 「駿河湾」の海を伝える水族を持続的・魅力的に展示するための水槽設備

本施設で想定する「駿河湾」を中心とした水族の展示を行うために必要となる展示水槽の水量規模については、展示室面積や他類似施設等の状況を踏まえ、合計で900～1,000t程度の水槽を設置することを検討します。水槽規模を大きくすることで来場者満足度向上をめざすのではなく、小さい水槽でも形状や照明を工夫することで魅力的な演出を施すことが望ましいと考えられます。例えば常設展示室「2-2 駿河湾-浅海」コーナーで検討されているシンボル水槽のような大規模水槽を1つ以上設け、その他は数t程度の小・中規模の水槽を複数設置することで、来場者に水族の魅力を十分に伝えることをめざしていきます。また、それに付随する予備水槽や維持管理設備などを適切に導入することとします。

(4) 周辺環境を活かした施設展開イメージ

本施設においては、施設内の活動に限らず、周辺の駿河湾をはじめとする豊かな自然環境や、様々な観光資源、日の出地区の資源を活用した下記のような展開が求められます。

- ①海に臨む公園としての再整備が期待される岸壁部のエリアなど、館から屋外へと広がる空間と連動し、市民の日常の憩いと来場者の交流を創出します。
- ②館の屋上空間などを活用することで、清水から駿河湾と富士山を一度に眺望できる観光スポットとして展開するなど、本施設ならではの立地を活かします。
- ③海洋・地球に関する国際的な学術会議などのイベントを実施する際にユニークベニューやパーティなどを開催可能な場や機能を設けます。
- ④施設周辺の倉庫群をはじめとするエリアの再開発を促すことで、商業施設やファクトリーなどに転用し、日の出地区全体での魅力・回遊性向上をめざします。
- ⑤クルーズ船寄港時には市の取組みである「まちは劇場」をはじめとした音楽イベントなどを実施することが可能なように、周辺敷地などと連携し展開します。
- ⑥施設と岸壁との距離の近さを活かすために、海洋調査研究船の所有機関や港湾管理者と連携して、日の出頭での海洋調査研究船と本施設の連携展示なども期待されます。

■周辺環境を活かした展開イメージの例（図表 5-5）



5-4 施設の魅力を向上するために

本施設の魅力を向上するためには、下記にあげられるような取り組みを検討していく必要があります。

(1) 周辺地区の再開発

【広域での集客】

- ・日の出地区における賑わいを創出していくためには、本施設以外の周辺地区の再開発も欠かせない重要な要素となります。
- ・また、本施設には大型の飲食施設は見込まないため、日の出地区における観光客の滞在時間を延ばすためには、特に飲食施設については周辺開発との調整が必要であり、効果的な機能や配置の検討が期待されます。

【研究施設の誘致】

- ・現在の計画では本施設の核となる「学術コンテンツ」は JAMSTEC や東海大学を中心とする連携先からの提供を想定していますが、今後、施設の魅力を更に向上していくために、ひいては清水が国際海洋文化都市をめざしていくにあたっては、本施設の周辺に研究施設を誘致することが望ましいと考えられます。
- ・静岡市の参考とするモンレーベイ水族館でも、近隣に研究施設を有し活動において連携をしており、このような構造を模索していくことが求められます。

(2) 津波災害への対策と防潮堤

日の出地区だけでなく清水港周辺が抱える課題として、津波災害への懸念が挙げられ、これに対しては静岡県および静岡市が実施策定している「静岡市地震・津波対策アクションプログラム」により、岸壁や防潮堤の整備を進めることで津波発生時の安全性の確保が期待されます。

したがって、本施設を検討するにあたっては津波避難の機能も兼ねた公共的な空間を設けること求められると共に、防潮堤の建設を前提として、施設周辺からのアクセスや施設からの眺望などを検討しなければいけません。

【対応の方針】

・津波避難ビルとしての機能

本施設は、静岡市総務局危機管理総室の定める「津波避難ビル」としての要件を満たすことをめざします。要件を満たすためには以下の条件が必要となります。

- 津波避難場所が一定規模（50 m²程度）以上の面積を有し、かつ、想定される最大の浸水深を考慮した高さ（避難の基準となる水位）以上に位置しているものであること。
- 通り又は、一定の道路に面してスムーズな出入りができること。
- 原則 24 時間避難が可能なこと。

- ・防潮堤の高さを活かした施設計画

防潮堤の高さはグラウンドレベルより約2.5m嵩上げされると想定されるため、本施設の1階にあたる部分は防潮堤より低くなり眺望が確保できないことが予想されます。そのため、1階部分は来場者向けの機能は設けず、管理機能など施設運営者のための機能を配置することが望ましいと考えられます。

また、防潮堤の岸壁側には防潮機能を兼ねた緑地の整備が検討されており、クルーズ客船利用者の来場はこの側からのアクセスが見込まれます。そのため防潮堤の上を通過し施設の上層階へとつながるような仕掛けが必要です。

(3) 水族展示・飼育などにかかる海水の調達

- ・水族の展示や飼育にかかる水槽用の海水の調達については、近隣の海水取水、運搬や人工海水等の手法の中から、展示内容・水槽容量等を勘案しながら詳細を検討していきます。

(4) 来場者駐車場の確保

- ・参考施設などをもとに年間来場者数を60万人と設定すると、ピークである8月の休日には、約7,000人/日の来場者が想定されます。この場合、最も滞留者数の増える14:00頃に約400台の駐車スペースが必要と考えられます。
- ・今回の計画においては、限られた敷地における施設の魅力を高めるため、さらに周辺施設間における回遊性を促進することや、地区内の車両交通動線などの最適化なども考慮し、来場者用の駐車場については、周辺敷地での民間開発の誘導も図りながら確保していきます。
- ・施設現在日の出地区には、日の出パーキング(430台)、マリソパーキング(570台)、エスパルスドリームプラザ(540台)といった大型駐車場が整備されていますが、現在の利用状況を踏まえながら、今後の周辺開発とも連携して適切な駐車台数を確保していきます。

第六章 魅力的・持続的な施設運営のために

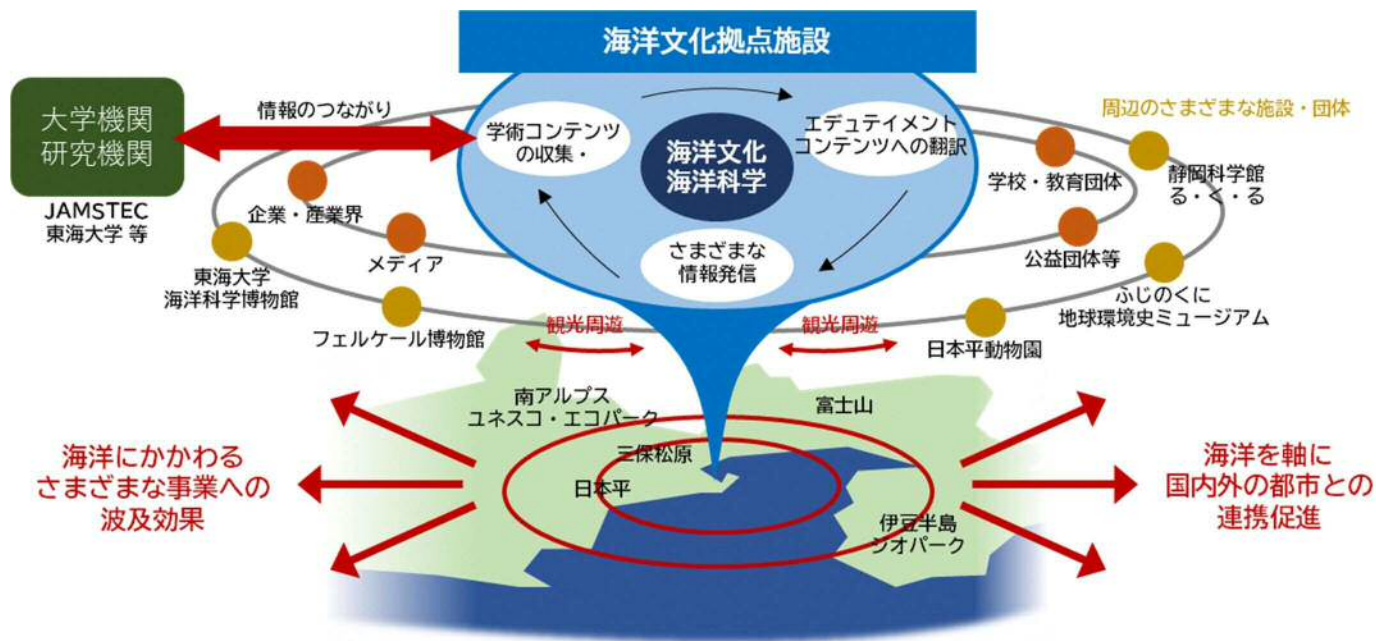
6-1 「海洋文化・海洋教育のメッカ」をめざすための施設運営の考え方

これまで述べている通り、本施設はコアコンテンツである海洋科学を活かしながらも、サイエンスに限らない多彩な海洋文化の創造・発信をめざしています。

そして、この活動を支えるためには、まずは分野に囚われずに多様な団体・施設・周辺環境とのネットワークを構築し、コラボレーションを図ることが求められます。

そのネットワークは施設の周辺に限らず、清水と海洋研究・教育の点で共通性がある世界の他都市（モンレーなど）にも及ぶことが望ましく、世界的な「海洋文化・海洋教育のメッカ」をめざし、「国際海洋文化都市・清水」の発展に貢献していきます。

■多様な施設とのネットワーク構築のイメージ 図表(6-1)



■ネットワークとコラボレーションの例 図表(6-2)

展開先の例	展開のポイント
研究機関	本物のコンテンツ・研究者に触れ、海洋への意識を変える体験を提供 ・国際会議やMICEと連動した取り組みを積極的に実施し ・研究者側に対しても、一般市民のニーズを発信する機会を創出
大学機関	次代を築く人材への、現場としての研究・活躍のフィールドを提供 ・大学の研究内容を施設の展示や教育普及活動を通じて実施、検証する場を提供 ・学芸員の実習、飼育員養成など、海洋教育に携わる人材育成の場を用意
小中学校	若年層から海洋教育にふれる機会を創る、清水ならではのアプローチを実施 ・理科や社会科に限らない多様な科目との連携による授業等での施設活用を促す展開 ・教員や教育委員会へ、施設の効果的な利用方法を浸透させる活動を実施
周辺文化施設	施設のポテンシャルを最大限に発揮するイベントの共同開催等 ・共同の企画や同一テーマでの連動した巡回展を実施し多様な学びを提供 ・さまざまな施設間のつながりを積極的に構築し相乗効果を生み出す
周辺観光施設	面での賑わいを創出する、清水港観光クラスターの形成 ・各施設来場者の相互利用や未利用層の利用機会創出を促進 ・清水港、日の出地区の周遊の拠点となり観光の中心拠点としての役割を構築
産業団体	産業界の活性化と交流のハブとなる施設運用 ・ユニークベニューなど国際会議やビジネスイベントの場を提供 ・展示やイベントなどへの企業の参画を促し、PRの場を提供
周辺環境	本物のフィールドを実感させる体験が、海洋・地球の総合的理解を促進 ・展示を入口に実際のフィールドへ促すことで、よりリアルな学びの機会を創出 ・地域資源を感じさせる情報発信を積極的に行い、多様なフィールドへの回遊を促進
市民活動	市民の活動のベース基地としての側面が、地域とのつながりを育む場へ ・施設のテーマに則した団体の活動拠点、活動発表の場を提供 ・地域イベントとの連携により、清水港全体の面での集客を支える展開

6-2 質の高いミュージアムを構築するための事業の考え方

(1) 本施設の整備・運営にかかる事業スキーム

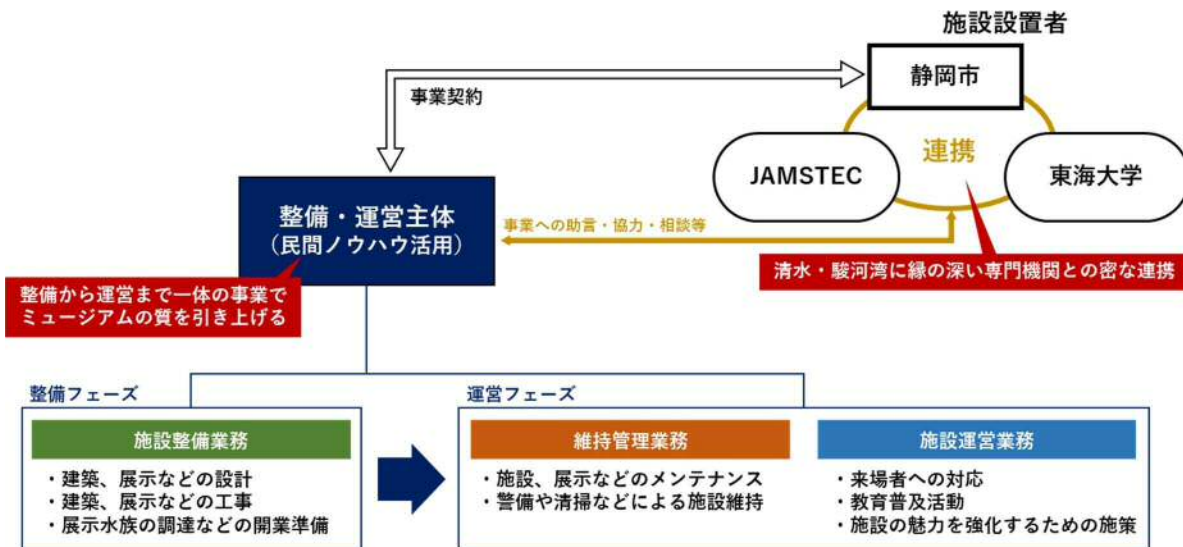
本施設を魅力的・持続的に運営していくためには、施設を実際に運営するスタッフによる運営ノウハウが蓄積するなど継続的な視点が重要と考えられるため、このような点に配慮した運営方式の選定が必要と考えられます。加えて、民間事業者などのノウハウを活用することによって、清水港地域における幅広い活性化や外部団体・施設とのネットワークの効率的な構築が期待されます。

したがって本施設では、官民連携事業手法などの事業手法の導入を検討することで、将来的な運営を見据えた、質の高い一体的な施設整備をめざします。

また、本施設の特徴として、これまでも記載している通り、清水港・駿河湾を拠点とした海洋学部を有する「東海大学」、海洋科学技術の総合的な研究機関である「JAMSTEC」といった、学術研究機関との連携が必須となりますが、整備から運営までを一体的に実施し、施設の魅力や集客力をマネジメントする整備・運営主体と、学術的に質を高められる研究機関、それぞれの強みを引き出しあう事業スキームを構築し、進めていきます。

特に、本施設で駿河湾を中心とした水族の展示を目指していくにあたり、これまでも駿河湾を熟知し展示を続けている東海大学海洋科学博物館のノウハウを取り入れる事業手法を検討していきます。

■事業スキームの例 図表(6-3)



(2) 海洋研究関係機関との連携スキーム

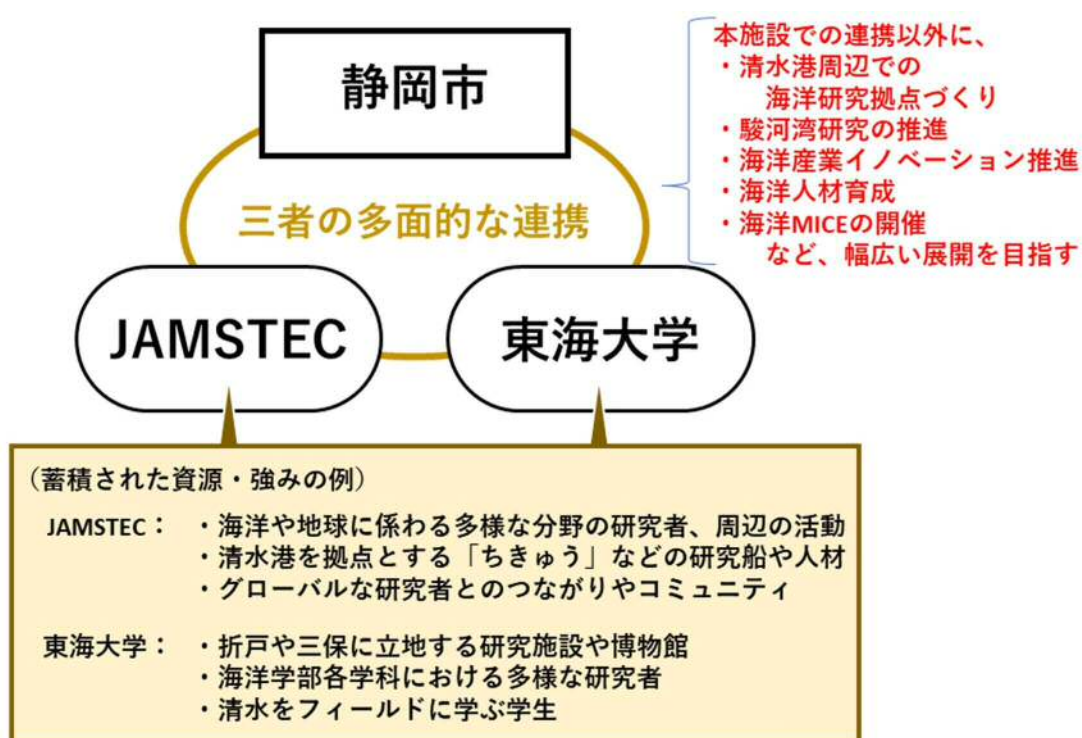
本施設を魅力的かつ独自性を有した施設にしていくため、清水にゆかりのある研究機関である東海大学・JAMSTECと静岡市の多面的な連携を基盤とし、それぞれが持つ資源・強みを活用しながら、施設への効果的な展開をめざしていくことが重要だと考えられます。

海洋科学・地球科学の分野の研究内容や成果、学術的な知見や関連した資料、関係する多種多様な人材など、東海大学・JAMSTECとの積極的な連携の上で両者が保有する資源の活用が図られることになります。

両者が現在持つ多様な資産（ヒト・モノ・コトなど）を活用しながら、施設の活動の質を高めると共に、両者の海洋研究活動を広く発信する場として施設を活かすことで、本施設に係る全ての関係者に広くメリットのある相乗効果を生み出していきます。

また、こうした連携体制を活かして、駿河湾の調査研究や、海洋人材の育成などの幅広い展開にもつなげていくことが期待されます。

■連携のイメージの例 図表(6-4)



(3) 事業評価・会議体の考え方

多様な関係者が参画する本施設を運営するにあたっては、各段階に応じた事業評価機能や専門性の高い会議体を設けて事業実施の目的や方向性をモニタリングし、運営主体側と改善策を協議していくことにより、経営面、学術・教育面でも、より質の高い事業運営を行っていくことをめざします。

また、事業活動に合わせた個別の作業チームと会議体（個別部会）を設けることで、事業活動の活発化と断続的な事業実施を行っていくことをめざします。

(4) 施設運営にかかる組織体制の考え方

本施設を運営するにあたっては、全体を統括する責任者をはじめ、以下のように主な運営部門、業務を定めます。しかし施設を効率的・魅力的に運営していくためには、部門に囚われない、組織横断的な役割のスタッフを配置するなど、部門間を横断する連携や取り組みが必要と考えられます。

①統括部門

- ・統括業務・・・組織全体を統括する。設置主体である市や、東海大学・JAMSTECをはじめとする外部の連携先と調整を行いながら、本施設の運営全体を管理していく。

②事務管理部門

- ・一般事務、経理、企画、来場者サービス業務
 - ・・・施設内での総務や庶務・経理・企画など、本施設の管理部分を担う。
また、来館者の接客や利用案内など、来館者対応も行う。
- ・広報業務・・・対外的な広告宣伝の企画、一般来館者誘致のための観光業者への説明、学校団体の利用誘致やHPやSNSなどの広報媒体の運用を行う。

③資料収集・研究連携部門

- ・研究機関などとの研究連携、学術コンテンツ収集業務
 - ・・・資料の収集保存や資料借用先との借用調整、研究機関との調整による研究成果などの収集を行う。

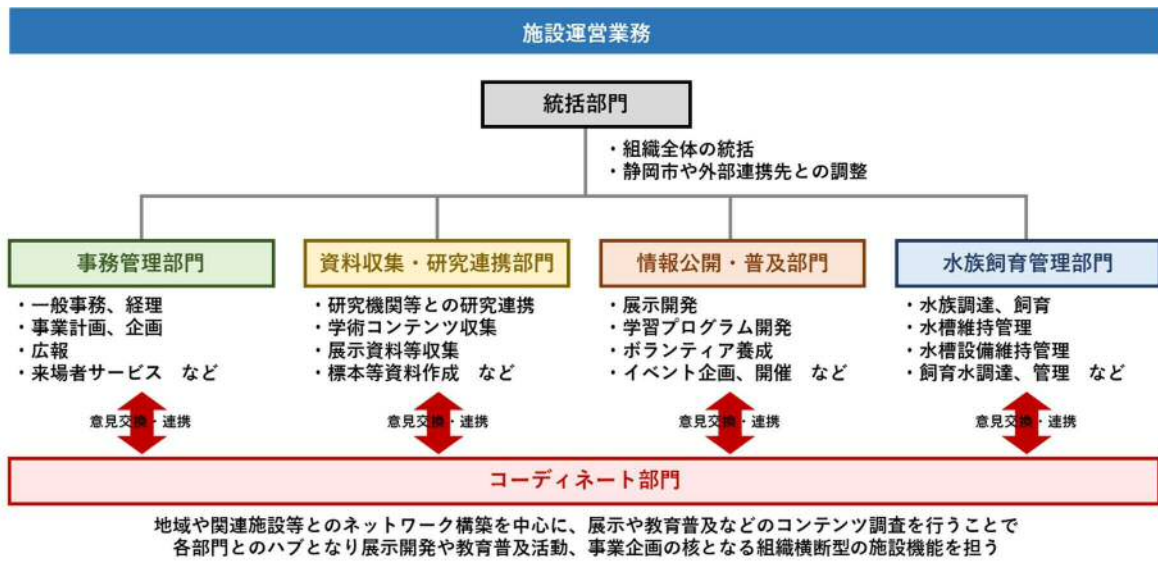
④情報公開・普及育部門

- ・展示開発、学習プログラム開発業務
 - ・・・展示コンテンツの開発や更新、学校団体利用時における学習プログラムの開発などを行う。
- ・ボランティア養成業務
 - ・・・本施設内外で行われる様々な活動に関するボランティアを育成する。
- ・イベント企画、開催
 - ・・・本施設で行われるイベントや特別展に関する企画を行う。

⑤水族飼育管理部門

- ・水族調達、飼育管理業務
 - ・・・水族の採集、輸送の調整、日常的な健康状態のチェック、水族生物への給餌などを行う。
- ・水槽維持管理業務
 - ・・・水槽の掃除、飼育水の循環状況のチェック、水槽設備の管理を行う。

■組織体制のイメージ 図表(6-6)



(5) 事業手法の考え方

本施設の整備及び運営を推進するにあたり、民間活力の導入を検討することで、施設・地域にもたらす効果が最大になると共に、良質で持続的な施設運営が可能となる事業手法を選定していきます。

基本構想でも述べられているとおり、施設の運営は、入館料や施設内での消費などによる施設収入を中心として行うことが期待されます。加えて、類似施設（水族館など）では民営の事例も見られる「文化施設」という性格をふまえ、民間活力とも連携した様々な官民連携事業手法（PPP＝パブリック・プライベート・パートナーシップ）による、低廉かつ良質な公共サービスの実現が考えられます。

そこで、今後の事業化においては、施設・地域にもたらす効果を最大にし、持続的な施設運営が可能な事業手法を構築していきます。

■事業手法の構築における基本的な考え方

①基本計画の実現性

・本基本計画における、目的や役割、各活動における考え方を、民間事業者などの創意工夫によってより良い形で実現できること。

②事業継続性と公共性

- ・本事業が継続して実施される「事業継続性」及び、入館料をはじめとする、施設内外での多様な収入による収益型事業を目指すこと。
 - ・施設活動を通じた海洋研究・学校教育との連携などの「公益性」を確保すること。
 - ・「事業継続性」と「公益性」のバランスを調整し、官民双方にメリットがあること。
- ※公益的なサービスで事業継続性を確保するなど、展開の工夫も検討する

③事業者への活動の自由度

- ・事業者が自らの創意工夫やノウハウを積極的、効果的に発揮しやすい環境を構築すること。
- ・事業者の発案が、迅速に現場での活動に展開可能な意思決定の環境を構築すること。
- ・ただし自由な環境においても、評価制度など監理可能なしくみを設け、良質で持続的な施設運営を確保すること。

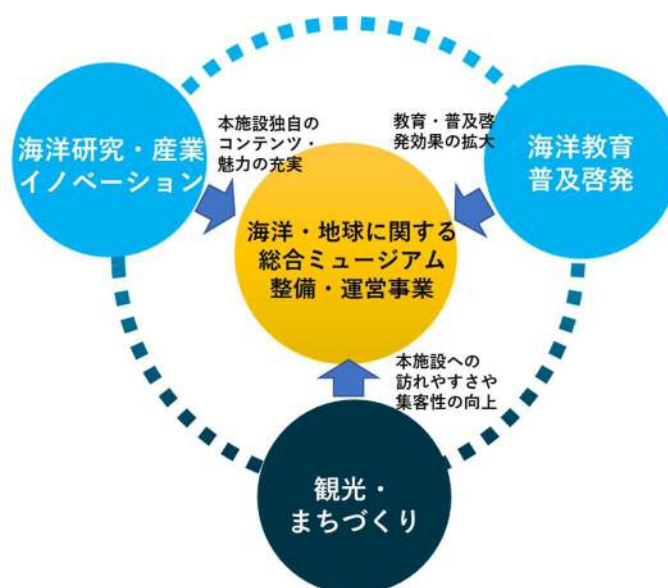
今後施設の詳細を検討していくにあたっては、上記の点をふまえると共に、事業費も含めた事業性を考慮しながら、公募条件等を決定していくこととします。

6-3 施設の効果を高めるために本事業と併せて必要となる取り組み

本計画で目指す「海洋・地球に関する総合ミュージアム」の効果をより発揮させるためには、今後、海洋文化拠点施設整備運営事業の外側においても、以下の各種取組を官民学の地域関係者と連携して取り組むことが必要となります。

これらの本事業以外の取り組みを併せて進めることにより、本施設の魅力や、発信力が高まり、また、集客性も向上するため、事業の運営にとってもプラスの効果が生まれることが期待されます。

■本施設の効果を高めるための関連取組イメージ 図表(6-7)



① 海洋研究・産業イノベーションに関わる取組例

清水港周辺を海洋研究・産業が活発な地域にするために、例えば、以下のような取組が必要と考えられます。

- ・清水港周辺で海洋研究や、関連技術を活かした海洋産業が立地できる港湾利活用の検討。
- ・総合的な海洋研究が展開できるプラットフォームの設立などの検討。
- ・海洋に関する研究者会議、学会等の誘致や、そのおもてなしのできるまちづくりの推進。

② 海洋教育・普及啓発に関わる取組例

地域ぐるみで海洋に関心の高い人材を育成していくために、例えば、以下のような取組が必要と考えられます。

- ・大学、研究機関、学校教育、社会教育、民間団体等による本施設の教育・普及啓発の場としての利活用促進。
- ・海洋に関心の高い一般市民や、専門知識を持ったベテラン人材を海洋教育のボランティアとして養成するしくみづくり。

- ・国の海洋基本計画、国連 SDGs14 や総合学習プログラムなど、海洋政策との連携強化。

③ 観光・まちづくりに関わる取組例

清水港周辺へ国内外から多くの人に訪れてもらうために、例えば以下のような取組が必要と考えられます。

- ・本施設周辺のにぎわい開発の促進。
- ・本施設周辺（日の出地区）での駐車場の拡充や、道路・交差点の改善、公共交通アクセス等の改善。
- ・観光コンテンツやそれらを結ぶ回遊ルート等の充実。
- ・客船、新幹線、飛行機等を活用した広域からの誘客強化。